
一つのゲーム

無気力

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つのゲーム

【Nコード】

N3761C

【作者名】

無気力

【あらすじ】

不変であつたつまらない毎日に退屈していた少年、水月大和は一通のメールであるゲームの参加を決められる。それは自分の夢を叶えるために戦いあう、そういったゲームだった。メールの着信音、それはバトルロイヤル開始の合図。

第一話：ゲーム開始

始まるのは異常なゲームだ。

ある日のある時間、携帯にある一通のメールが来た瞬間、水月大和まるとという人間は日常を失い、非日常を手に入れる。

夏も近づいてきた暑苦しい朝、携帯の着信音で水月大和は目を覚ました。

気だるそうに起き上がり、大和の頭元に投げ出されていた携帯を手取る。その瞬間に違和感に気づいた、これは自分で決定した着信音ではない、と。

それにつき、不思議に思いながらも大和はメールボックスを開く。案の定、そのメールのアドレスは携帯に登録してあるものではなかった。だがとりあえず、大和はメールの本文に目を通した。メールにこう書かれていた。

『拝啓 水月大和殿

あなたはこの度、ミスガルスへの参加が決定いたしました』

「はあ？ 意味わかんねえ」

内容はたったそれだけだった。迷惑メールや悪戯メールだったとしても、もっと本文が多くなるはず、しかしメールには説明もない、簡単にまとめられた文しかなかった。

（参加が決定？ 勝手に？）

その時に下から母親の声が聞こえる。

「大和、早く起きなさい、遅刻するわよ」

その声に大和は詮索を止めた。削除するのはめんどくさいらしく、どうせしばらくしたらほかのメールに埋もれわからなくなるだろう。と思い、携帯を閉じる。

「にしても、ミズガルズって何か聞いたことあるような気もするな」しかし、やはり少し気にしながら、いつもと同じ高校の制服に身を通していく。

明日から、高校も夏休みに入る。しかし、そんな事を全く喜ばないかのように、大和はいつもと変わらない。

夏の半袖であるカッターシャツに身を包み、着替えも終わる。早く朝ごはんを食べようと思い、扉に手をかける。

その時に再び、ポケットにしまい込んだ携帯が大和の知らない着信音で鳴り出す。だが今度はメールを確認もせずに、扉を出て自宅の階段を下りる。階段の中ごろで、大和の足は止まった。

唐突に携帯の着信音が変わってもいないはずなのに、大音量で響きだしたからだ。

少し、イライラしながら大和は携帯を開ける。そしてメールを確認する。新着メールは二件。

アドレスはどちらも、先ほどのミズガルズと、意味のわからないことが書いてあったメールと同じものだった。

一つずつメールを開けていこうとし、一つ目のメールを開ける。そこにはまた短い文で

『あなたの願いはここで叶うでしょう。そしてあなたに否定権はありません』

と書かれていた。

大和はどうでもいい、といった感じで次のメールを見る。

『ミズガルズへようこそ』

一〇八人目のプレイヤー』

その瞬間、携帯の画面が突然輝きだした。

「くっ！ 何だこれは」

光は静まることを知らずに、いつそう輝きを放ちだす。

大和は耐え切れなくなり目を閉じた。しかし、目を閉じようが光がそこに存在することがわかるような強い光。

しかし、唐突に視界は暗くなる。光が消えたのだらうと理解できなかった。

大和はゆつくり目を開ける。

そこは見たことの無い場所、見知らぬ街のような場所。先ほどまで自宅の階段に存在していたはずの大和は、理解できずに辺りを見回し始める。

どうなっているのか、理解できない。

呆然としている大和は、再び鳴り響く携帯の着信で我に返る。急いで、来た筈のメールを開く。

そこにはこの場所の説明らしきことが書かれていた。

『突然の出来事で少々驚いているでしょう。ここはあなたが存在する場所とは違う、先ほどから明記しているミズガルズです。ここでは貴方の願いをかなえることが出来るかもしれませんが。しかし、それはこのゲームの勝利者となった時だけ、ここでのルールは存在しません。ただ、自分以外の人間を消せば勝利となります。もう一度言いましょう、あなたに拒否権はない。さあ、一〇八人での殺し合いのゲームの開始となります』

携帯を閉じて考える、その文の意味を大和は理解できない。ここがさっきと違う場所だっていうことは理解できる。

大和はこんな場所など知らないから。

しかし、ゲーム、殺し合い、自分以外の人間を消す、それがわからない。なぜ自分はそんなゲームに参加しているのか、なぜこんなゲームが存在するのか。

大和は恐怖していた、しかし同時に喜んでもいた。

「何でこんなことになったかはしらねえが、俺は出れた。変わることの無かった、つまらない日常から抜け出せた！」

日常、いつも変わらない、いつも同じことばかり繰り返してきた。それがこの瞬間に変わった。大和はそれを喜ぶ、そしてこの意味のわからない状況に混乱する。

「　だが、何なんだ。この意味のわからない状況は……………」

そう思いながらも、この状況を理解するために大和は、この見知らぬ街を歩き出した。

しばらく歩いているが、誰も見かけることは無かった。メールではここには一〇八人の人間は存在するはずなのに、大和は不思議に思いながら、街の大通りらしき道から路地のほうにそれてみる。

ドゴンッ

異常な音。まるで車が猛スピードで何かにつかつた様な、そんな音。

しかし、音の発信源は車などではなく、大和の視界に入った少年だった。少年は大和が入ろうとしていた路地に嫌われるかのごとく、弾丸のような速度で大和の横を通り過ぎていく。

「……………おいおい、マジかよ。何で人があんな風に飛ぶんだよ」

大和は弾丸のような速度で、壁に衝突しそうな少年を目で追った。しかし目で追うことも出来ず、直ぐに壁に視線を移す。

少年が背中から壁に衝突し、血を吐いている。その量がおかしかった、明らかに吐いただけの血ではないであろうことは分かる、そして分かったときには地面が赤に侵食されていく。

その赤の侵食は止まらない、拡大していく。と同時に少年の顔が徐々に青ざめていく。

それを見ると大和は少年に駆け寄っていく。この状況を理解できない、けどあのまま放っていたら少年は死んでしまう。だから大和は走った。

走り出す瞬間、大和は路地から出てくるもう一つの人影を見た。しかし、そちらに気をとられたりせず、少年に向かって走っていく。

「おい、大丈夫か？ 生きてるか！？」
少年を抱え、必死に話しかける。

しかし、どんどん青ざめていく少年からの返事は返ってこない。それに反してか、大和の声に反応した違う声は返ってくる。

「無駄だ、そいつは死ぬ。つまり脱落者だ」
死ぬ、脱落者、大和はやはり現状を理解できない。

少年は路地から飛び出し、弾丸のような速度で壁にぶつかった。そうして血を吐いた、吐いただけじゃない、元から存在したであろう傷から血が噴き出し、血の海を作っていた。

だが、大和はなぜそうなったのか理解が出来ない。
だから、大和はもう一人、声がしたほうを振り向く。

そこには、日本語を話すのだが、銀色の髪をした明らかに日本人ではないような少年が立っていた、年齢はおそらく大和より少し低いくらいだろう。そんな少年に聞く。

「何なんだよこれは？ 死ぬ？ 脱落者？ なんなんだよそれは！？」

大和の問いに少年は微笑を浮かべながら、答える。

「君は知らないのかい？ このゲームを……………願いを叶えるこの

ゲームを」

「だからゲームってなんなんだよ！」

「……………驚いたや、本気でまだこんなプレイヤーが存在してたんだ、でもまあ、君は簡単に殺せそうだ」

「なっ!？」

少年は手を振り上げた。その手にはなにやら指輪のようなものがあつた。

大和はこんな状況の中、なぜかそこまで慌てる事などしなかった。ただ少年を観察していた。

「死んでもらうよ。『弾奏』」

少年がそう言った瞬間、指にはまっていたはずの指輪が閃光を放つ。

光が晴れる時、少年が持っていたのは指輪ではなく楽器だった。

それはフルートのようなもの。

「なんだよそれ」

少し、笑つかのよう大和は聞く。

「これは、このゲームでの武器だよ」

「そんな楽器がか？ 俺をたたき殺そうってか」

そう軽口を叩くが、大和は理解していた。今、大和の近くで死にかけている少年は、確かにこの少年に死の寸前まで追い込まれたのだ。

そして、そこまで追い詰めた道具は何かしら特別なもの。だから、それが見た目がただの楽器であつても不思議ではない。

「たたき殺すのは間違ってるね。僕の『弾奏』は音を弾丸に変えるんだから。……………ああ、潰すのは間違ってるね」

少年の顔には嬉しそうな笑みが浮かぶ。

対し、大和の顔には引きつったような、無理やり作ったような笑みがあつた。

「じゃあ、死のうか」

その言葉の後、大和は聞いた。フルートの綺麗な音色を……

音は凶器となり、大和を襲う。まるで銃弾が防弾の服に当たったかのようなそんな感触。何発も食らえば耐え切れるものではない。しかし、大和は動くことが出来ない。それはまるで音に拘束されている、そんな様な感じだった。

「……………ストップ」

そんな声が聞こえた気がした。気のせいかも知れないが、大和の耳にそんな声が届く。

しかし、やはり気のせいではなかった。声が聞こえた、その瞬間に音の衝撃は、音色は無くなった。

いやそれだけじゃない、目の前の少年が急に動かなくなったのだ。いや、少年だけじゃない、この時間が、大和以外の存在をかき消しているかのように時が止まった。

不思議に思い、大和は辺りを見回す。

後ろを見た瞬間、大和の視界に一人の黒のロングコートを着た男が立っていた。

「さて、一〇八人目のプレイヤーだな。困るんだよ、スタート地点から動くとき。現に今、お前は殺されかけた。いや、俺が来なければスタート前に殺されてた」

飄々とした声、いつもなら激情するような見下した声。しかし、今の大和は怒っている余裕など無い、この状況を理解するのに苦しんでいるんだから。

「さあ、説明はいるかい？」

「説明……………ああ、さっさとこの意味のわかんねえ場所の説明でもしてもらおうか」

「OK、それが俺の仕事だしな。喋ってる間、質問は無しだ。まずはだな」

ここは、ミズガルズってのはメールで知ってるな。それでゲーム、この単語の意味はしらねえよな。このミズガルズではゲームをやっ

てんだ。他人を殺して、自分が生き残れば一つだけ願いが叶うって
いうゲームだ。テメエやそのガキ、それにそこで死にかけてるの
もプレイヤーだ。ああ、ちなみに俺はプレイヤーじゃねえぞ、案内
人だ。……………まあ俺のことはどうでも良いが。それでだ、お前らは
殺し合う、そこで使う武器ってのが、そのガキが着けてた指輪、
見てたか？ あれだ。それを渡してここの説明すんのが俺の役目。
「 …… ってなわけだが、理解したか？ 」
「 理解はしたが、納得はしてねえ。意味わかんねえよ、俺は別に叶
えたい願いなんて無い、なのに何でここに来たんだ」
「 知らないねえ、自分でも知らない願いつてのがあるんじゃないか？ 」

大和は男の言葉を確認めるかのように黙り込む。

「 …… まあいい、これは夢じゃねえんだよな」

「 夢であつて欲しいか？ 」

大和は再び少し考え、答えを導き出す。

「 どっちでも良いな、確かに殺し合いなんて嫌だが、不変だった日
常を変えたのはこれだしな。ものは考えようだ」

「 まあ、どう考えても、自分以外の人間を殺さなきゃここから出ら
れねえがな」

「 そこんとは何とかしてやる。……………で、指輪ってのはテメエが
くれんのか？ 」

「 ああ、…………… 手を出しな」

大和は言われたとおり手に手を差し出す。

黒コートの男はその手に自分の手を乗せた。すると、手と手の間
で光が起こる。

大和はその強烈な閃光に怯み、見ることが出来ずに目をそむける。

「 これがテメエの能力だ」

大和は手を開く。そこには今まで無かつたはずの指輪、そこには
『磁砲』そう刻まれていた。

「 『磁砲』、これが能力か？ 」

「ああ、……とりあえずいったんスタート地点に移動するぞ。そこからスタートだ」

「ああ」

大和は目をつぶる、光が遮られ、視界が闇に支配される。

「目を開ける」

言われたままに、目を開ける。そこは始めに大和が降り立った場所。見知らぬ場所、今となっては二度目の場所。

「ここからスタートだ、テメエの能力はテメエで考える。そこまで面倒はみねえ」

「別に、いいさ」

そう言うと、黒コートの男は歩いていく。

少し歩くと、立ち止まりその場で手を伸ばす。すると何もなかったはずの場所に黒い空間が出来る、一見不気味な空間だが黒コートの男は迷うことなく入っていく。黒の空間が消えると同時に、男はいなくなっていた。

大和はその瞬間を見ているはずだったが、男が消える。その理由を理解することは出来なかった。

しかし大和は、もう驚きはしなくなった、意味の判らないことはたくさん見た。しかし、まだまだ見るのだろう。

そう思った瞬間、大和は嬉しそうに笑った。それは狂ったのではなく、ただ変えたかった日常が変わったことへの喜び。

「さて、殺し合いは面倒だ。もうゲームは始まっている。俺を入れて一〇八人、なら、既に何らかの組織は存在してるだろうな。そういったには見つかりたくねえな」

そういいながら、大和は歩き出した。

見ず知らずの街、意味のわからないゲーム、そんなことは関係なかった。ただ日常を変えたここに感謝する、それだけ。

「俺は変わることの無かった日常から抜け出せた！」

歡喜の咆哮、そして歩いていく。

殺し合いのゲームという、非日常の世界を………

第二話：『磁砲』発動？

「しかし、広いんだなこの街は」

突然、来てしまったこの街 ” ミズガルス ”

このゲームの案内人という者は、この街は願いを叶える場所だと言っていた。そしてその願いを叶えるにはゲームに生き残らなければならぬ、そうも言っていた。このゲームは大和を含め、一〇八人のプレイヤーがいる。

そして既にゲームは始まっている。今、大和が来た時点での人数は変わっているのかもしれない。

大和はまずすべき事を考える。

（まずは、現状の人数の確認が出来りやあな。それに、クリアを目指す組織の確認だな。人数が多いんだ、チームを組んで戦う奴等もいるだろう）

まずは人数の確認、組織の確認。それが大和が第一にすべきことしかし。

「全く、どうやって確認すりゃ良いんだよ？」

そう、組織の確認はともかく、人数の確認なんて出来るはずも無い。

途方に暮れながら、誰も通らない大通りを歩く。先ほど、一人の少年が死に、大和自身が死に掛けた場所。先ほどいた、銀色の髪をした少年はもういない。どこかへ行ったのだろうか。

大和は歩きながら考えている。今度は、今なすべき事ではない、ただ、このゲームの意味を……………。

このゲームは自分以外の参加者プレイヤーを全て消せば、勝利者となる。きつと全て消せば、あの案内人が現われ、自分のいる状況を教え、そして願いを叶えてくれるのだろうか。

しかし、大和が考えているのはそんな表面上のことではない。こ

のゲームの意味、なぜこんな人を殺すゲームを行い、その優勝者の願いを叶えるのか分からない。

「考えてもわかんねえ」

どれだけ考えても理解できない、このゲームの主催者は誰なのか、その者の目的が何なのか、ただの快樂を楽しんでいるのか、何か特別な目的があるのか。全てを理解する事は出来ない。

ただ大和が理解しているのは、自分もその異常なゲームの参加者であること、そしてこのゲームに生き残らなければならないこと。それだけだった。

「つてわけで、まず重要になるのが、能力なんだよな」

そう言いながら、左手の親指にはめてある指輪に目を通す。左手、それは想う力。左手の親指、それは自分の意志で現実を切り開く、難関にぶつかりそれを突破する、といわれている。

単なる願掛けかもしれないが、それぐらいはしても良いだろう、そう思って大和はそこに付けていた。

そして指輪に小さく刻まれている、『磁砲』という文字に目をやる。

同時に考える、あの少年が能力らしき力を使ったときのことを。

確かあの少年は、指輪をかざして『弾奏』と言っていた。あの時は分からなかったが、それが能力なのであろう。だから大和はそれを真似てみる。

「えつと、『磁砲』？」

そう言う。

だが、何も起こらない。少年のときとは違い、指輪が無くならない。

大和は首を傾げる、意味が分からない。何を間違ったのか、それを考える。

しかし、そんなこと思いつくはずも無い。普通の日常でこんなことを考えることなんて無いのだから、大和の中で、その問いに対する答えが存在しないのだ。

「わけわかんねえ。何で何も起きねえんだ？　おい、『磁砲』！」
大和は訳も分からず、もう一度叫ぶ。しかし、やはり指輪に変化は無い。

大和は諦めたのか、止まっていた足を再び動かす。
確かに指輪に変化は無かった、だが、大和の周囲で変化はあった。
しかし大和自身もそれに気づくことは無く再び歩き出した……………

大和はいまだ大通りを歩いている。もう一時間近く経つが、誰も見当たらない。

本当にこの街に一〇八人の参加者がいるのか、と問いかけたくなるほど、街は静かだった。

しかし、考えても見れば、いつ殺されるか分からない状況。そんな中、大和のように大っぴらに大通りを歩くほうが珍しいのかもしれない。

だが、そんなことに気づいた様子も無く、ただのんびり歩いている。

「暇だ、殺し合いは始まらなくて良いが、誰か出てこいや。暇すぎて耐えられん」

そんなことを洩らす大和、それが始まり。

大和がこの街で始めて、戦うということの始まりだった。

「暇なら、遊ぼうよ」

突然、大和の背後から声が聞こえる。その声に反応し、大和は振り向き、距離をとるため一步飛びのく。そして、声の主と対峙する。
振り向いて見えたのは、大和と同じ黒い髪をしていて、大和より

少しばかり背の低い少年。といつても、大和自体175越え位の長身であるため、低いとは言いい切れない。

その少年は大和に向かい笑いながら、話してくる。

「君はどれくらいだい？」

大和は一瞬迷った。何を聞いているのかまったく分からない。

「何、言ってるんだ？」

「君はここに来て、ゲームを始めてどのくらい？」

大和はその時にやっと、質問の意味を理解した。しかし、大和は考える。ここでさつき来たばかり。などと言えば数時間前の二の舞に成りかねないのだ。

かといって、ずっと前からいる、などと言っても結局のところ戦いは始まるだろう。だから大和は考える、最善の方法を……………

(……………そんなことが一瞬で思いつくほど、俺の頭はできてねえ、な。仕方ねえ)

「ここにはさつき来たところだ。分かったかコラ！」

自分の意思で現実を切り開く、難関を突破する。大和がかけた願、それに賭けてみることにした。

だからといって、喧嘩を売る必要は無かったが……………

「ふーん。まあ、どうでも良いんだけどね。ここでは弱肉強食って訳だからさ、生きるか死ぬかしかない訳だよ」

「聞いたいてなんだよ、それ！」

少年はそう言う。

少年について、大和が知る分けないのだが、一つだけはわかる。ここに来てからの時間は自分より遥かに長い、と。

大和は少年を凝視する。その手を見続ける。しかし、その手にこの街で戦っていくはずの指輪が無い。

警戒しながら、不思議に感じ観察していると、少年は笑いながら聞いてくる。

「どこ見てるのさ、指輪？ 僕のはここだよ」

そう言って少年は紐で首にかけていた指輪を手にし、小さい声で言う。

「『劔奴』」

少年は叫ぶ。

この街での指輪の存在は戦うための武器というものだ。それは別に自分が持つ武器という縛りは無かった。しかし大和はそんなこと知らない。

現れたのは、初めに会った少年の楽器とは違う、武器じゃない者。それは人間だった。

それを見ても、大和は驚くほど冷静だった。大和は驚愕より先に、知識を働かせ、あれが何であるか考える。

中世を感じさせるような、二振りの劔を持った人間。着こなされた甲冑は所々削れていたり、破壊されていた。

そして、甲冑から覗く目は早く、見つけた獲物を殺したい。と叫んでいるように見えた。

大和は鋭く光る眼を無視し、それがなんであるか思い出す。思いついたもの、それは現代にいるはずの無い人間。

「グラディウス？ 劔闘士か……」

「へえ、よく知ってるね。一目見て、あの劔がグラディウスって判るなんてね」

「残念ながら、ちょっと興味があつてね」

頬を引きつらせながら、答える。

本当は当たつていて欲しくなつた。劔闘士という存在は猛獣などと戦い続けた罪人たちのこと。これが本物の劔闘士であるとすれば、大和より遙かに戦いなれた存在である。

だが大和は同時に考えていた。確かに脅威かもしれない、しかしそれは古代ローマでのことだ。今に本物である劔闘士が存在するはずが無い。

しかし、その完全再現。それが少年の能力であるかも知れない。大和には分かりきれないが、一つだけ、思ったことを口にする。

「悪趣味な能力だな」

悪趣味。それは完全に支配した人間を戦わす、ということについての大和から少年への罵倒の言葉。

「そう？ 結構好きだな、この能力。だって、知れなかった本当の事実を知れるんだしね。ああ、ちなみにこいつはね、“デイマカエリ”って言う、二刀流の剣闘士だよ。ほかにもね一杯いるよ」

一杯いる。少年がそういった瞬間、少年の周りに光が現れる。

それは大和がこの世界に来たときには劣るが、確かに強烈な光だった。

大和の眼はその眩しさに負け、一瞬閉じられる。

閉じた目を照らしていた光が無くなり、暗くなる感覚と同時に、ゆっくり目を開ける。

刹那、目の前に現われた二振りの剣が大和を襲おうとする。

「んなつ！ つぶねえ！」

間一髪、まさにそんな言葉が相応しかった。大和は勢いよく仰け反って、横薙ぎに斬りつけられた一撃を回避する。

体を戻すと、少年を見る。

「駄目だよ、戦いの中で目を瞑っちゃ」

光が収まったときから、少年は三人の剣闘士に守られていた。

巨大な槍を持った者、湾曲した剣を持った者、そして極力視界を遮る顔を覆った兜を被り、馬の背に跨っている者。

三人、いや少年が言った“デイマカエリ”、という二振りの剣を持った剣闘士を合わせると四人。それが大和の前に立っている。

対して、大和は丸腰。加えて言えばに言えば、自分の戦うための能力すらわからない。

「みんな行けえ」

短く、単純な命令。しかし、その声に忠実に四人の剣闘士は大和に向かつてくる。

自分を守るすべを持たない大和のへと……

「のふっ！ へいっ！」

奇妙な声で回避をするのは大和だ。同時に襲う、三つの剣、二つの槍を必死にかわす。出来るはずが無かった。しかし、なぜだか判らないが、直撃をするはずの剣や槍は大和を避けるかのように少しぶれる、だから大和でもよけることが出来た。

少しばかり、掠り、服を切られたりしているが……

そして、四人を操るのは苦しいのか、少年は顔を顰めている。

瞬間、光が放たれ、大和を襲う剣闘士が一気に減った。そこに存在し残ったのは、少年が大和に初めに見せた剣闘士、“デイマカエリ”だ。

「やっと、消したのかよ」

「どうして君はあれを避けたのかな？ 確かに四人の制御は出来なくて精密じゃなかった、でも素人がなぜ避けれる。君の能力なのか？」

「………考えてみるよ」

大和はそう見下したかのように言う、だが大和だって理解できていない。事実、避けれていたのは少年が遊んでいるのだろう、そう思っていたのだから。

再び考えようとするが、今度は一人になった剣闘士が襲ってくる。先ほどとは比にならない速度、そして正確さ。

袈裟切り、振り下ろし、突き、その三つの攻撃は止まることが無い。流れるように連続で繰り出されてくる。

だが先ほどと、まったく違ったのは剣闘士だけではなかった。

渾身のはずの横薙ぎは、大和のわき腹近くで止まり、もう一振りの剣は振り下ろされ、大和を避けるように地面を切る。

「なっ！？」

「何遊んでんだよ」

言うが、大和は分かっている、少年は遊んでなどいない。本気で大和を殺しにかかっている。そのはずだが、剣は全て空を切る。

大和は考える。無い知識を振り絞り、この場にある欠片を探す。

この場にある欠片、それは少年の剣闘士、二振りのグラディウス、大和の能力、何らかの力で、外される攻撃。

考えたのは大和だけではない、少年も、剣闘士から意識を離し、考えている。

そのせいか、剣闘士の攻撃は先ほどの流れるような剣技は消え去り、単調でしかない攻撃に変わった。

先に言葉を発したのは大和だった。

少年より、少し多くのヒントを持っているため、であろう。

「簡単じゃねえか」

大和は小さく声を出す。それはまるで、探し物をしていたとき、実は目の前にあった。脱力感のある、そんな感じだった。

（俺の指輪に刻まれていたのは『磁砲』という文字、この文字から取れるものは、『磁』。なら剣を、金属を避けていたのは微々たる『磁力』のおかげ。

簡単だ、俺の力は磁力、なぜ指輪が変わらなかったのはわからねえが、俺は今、この場では、磁力を支配する。？ でも……………なんでだ？ 俺の指輪は……………）

分からない事はあるが、大和は理解した。というかのごとく、少年を見下しながら声を出す。

「残念だったな少年、テメエじゃ俺には勝てねえ。相性が悪かったな」

大和は笑いながら少年を、剣闘士を見る。

少年はひるむ様子も無く、ただ自分の近くに”ディマカエリ”を戻す。そして、鋭い眼光で大和を睨む。

「君の力は分からないけど、僕は負けない。負けられない。夢を叶えるんだ」

「そうまでして叶えたい夢ってなんだよ」

「君に、言う必要は、無い！」

そう言つて、“デイマカエリ”を走らせる。

二振りの剣は、突きの形で大和を狙う。しかし、大和は能力を理解した。完璧ではないにしろ、自分の力を理解した。だからその剣に向かい手を伸ばす。

グニヤリ、そんな効果音を立てたのかは定かではないが、剣は無残にも湾曲する。

「なっ!?! 何でだよ」

「デメエには教えねえよ」

そう言つて少年に近づいていく。

「くっ、戻るんだ」

無残に湾曲した二振りの剣を持った“デイマカエリ”が戻ってくる。

しかし、大和は、一直線に少年に向かって行くそれを蹴り飛ばす。簡単だ、それは大和を見ていない、少年しか見ていないから。走ってくるだけの存在と化す、だから簡単に、素人である大和の蹴りですら効いてしまう。

自分の駒がやられた事で、少年は覚悟したかのように目を瞑る。

「おいおい、目を瞑るのはいけないじゃないのか？」

そう言つて、歩いていく。

そして少年の隣を、……………通り過ぎる。

「じゃな!」

そう言つて、大和は走り出す。まだ理解の範疇を超える能力であ

る、磁力を使い、足元に反発を起こさせる。それはリニアモーターカーの原理、モーターは自分の足。加速はとまらず、少年からは一瞬で見えなくなる。

少年が目を開けると、大和はいない。自分を殺さずに去っていった。

「甘いね、それじゃこれから生きてはいけないよ……………」

そんなことは大和に聞こえているわけが無い。

そうして、少年はどこかに歩いていった。少年は始めてこのゲームの中、戦いに負けた。でも命はある。まだゲームオーバーじゃない。だから戦い続ける、大和とは違う理由で……………

「俺はどこまで行くんだあああ!!！」

大和の加速は留まる事を知らないかのように、速度を上げていく。大和は自分自身の能力を理解は出来た、しかし、把握することが出来ていない。だから能力に振り回される。

「止めて欲しい？」

「出来るならとめてくれ！ん？」

助かった、そう思う前に大和は不思議に思う。自分は今、恐るべき速度で移動している。そんな大和の耳に人の声が届くかどうか。簡単だ答えは、ノーだ。

聞こえるはずが無い。もし通ったときに聞こえたのだとしても、風にかき消されるだろう。

(空耳か？ いや、でも確かに)

そう思いながら、先ほど通った道を見ようと後ろを振り向こうと

する。

ゆっくり首を回した瞬間、大和の顔は驚愕の表情を浮かべる。

おそらく時速二百キロを超える速度の中、大和の横に同じような速度で走る少年を見たからだ。

「つんだ、テメエ!？」

それしか言えなかった。

太陽の光を受けず、色素を無くしたかのような白く、少し長い髪をしていた少年は笑っている。とても嬉しそうに……

その表情は確かに笑ってはいる、だがどこか笑う以外の感情をなくしたかのように見える。だから、少年は笑うしか出来ない。

その表情、というか少年が可笑しく思えたのか、驚愕から、少し笑みを漏らす。

「フフツ、面白いねえ。そんな表情、欲しくなっちゃうよ」

「はあ？」

ドゴツ

「つて！」

その時に、やっと大和は止まれた。横で嬉しそうに笑う少年の手を借りずに……

しかし、止まったといつても、ただこけただけなのだが……

まあ、止まったことに変わりはない。

地面を無様に滑りながら、少しづつ体勢を持ち直して再び少年に問う。

「何もんだよテメエ！ 何の用だ」（つてかいきなり二人目かよ、てか何でここの連中は突然にしか表れねえんだよ）

「用？ フフツ、簡単じゃないか、この街で会ったときの用なんてね」

つまり少年は大和を殺そうとしている。そういう事だった。

大和も、そんな事は判っている。ただ、少しばかり、期待してみただけ。

「つまり俺を殺すのか」

「そうだね、君は感情が豊かそうだし貰いたいな」

「何言ってるんだ？」

意味がわからない、そういった様子で大和は少年に問う。

感情を貰う、確かにこの少年には、笑い以外が無いように思える。しかしそれは思えるだけであって、無いはずがない。

人間には表情がある。そして感情がある。その中で少年は喜怒哀楽の喜、それしか存在してないような、そんな物言い。

「じゃあ、殺すよ」

笑いながら言う。それがいつそう少年を不気味に彩る。

「笑いながら言うんじゃない」

「無理」

「ってか、俺は死なねえよ！」

そう言って、大和は駆け出す。

先ほどと同じこと。加速し続ける、問題はあるが、命にかかわることじゃない。

だから、大和は逃げることを優先した。

「速いね」

大和は一瞬で少年を振り切る。

声が遠くなるのを確認する。そして考えた。

速度の調整などいらない、そのうち止まればいい、と。

数秒後か、不意に大和は後ろを振り返る。

「でもね、僕も速いんだ」

先ほど聞いたばかりの声が聞こえた。

声の主である少年は白い髪を靡かせ、大和の真後ろに付きながら、同速度で疾走していた。

「でもこのままじゃ、戦えないな」

ドゴンッ

その音が聞こえたのは大和が地面に転がってからだだった。

突然、大和が高速で走るための磁力がなくなった。

なぜか分からない。ただ、急にはとまれず、加速したまま少年の足払いを受けた。それは確かだった。

(んだよ、お試し期間でも過ぎたか?)

そんなことを考えながら、顔を上げる。

少年は、大和が派手にこけた場所で静かに止まる。

そして、一歩一歩大和に近づいてくる。

「君はどうやって死にたいかな?」

少年は殺すことを面白がっているのか、不気味に笑っている。

まるで死神だ。大和はそう思っていた。

しかし同時に、まだ俺は生きる、まだ非日常を歩めちゃいねえ。

そうも思っていた。

ゆえに、大和は答える。

「俺はテメエを諭して、生きてやるよ」

自分の意思で現実を切り開く、だから選択肢は自分で決める。

「やってやるよ! だから、今度は力だけじゃなくて、姿も見せる

! 『磁砲』!」

第三話：無力なもの

「『磁砲』！」

大和は呼ぶ、自分がここで戦うための力を、現状を打破するための力を。

「何をしてるの？」

「さあな？」

声虚しく、指輪に変化は無い。それはこの場での、大和の無力さを示しているかのよう。

能力の発動には何か条件が存在するのだろうか？ 大和はそう考える。そして、自分には、目の前の白い少年にも、剣闘士を操る少年にもある何かが、足りない。

それが何であるか考えたいが、そんな猶予をくれる訳がない。この”ミスガルズ”において、自分以外の人間は全て敵だ。だからそんな敵に対し情けなど無い。むしろ好都合だろう、能力の使えないプレイヤーなど簡単に殺せるのだから。この街において自分さえ生き残ればいいのだから……………

「さあ行くよ、手加減は無しだよ」

「少しは手加減しろ」

「無理」

少年はニツコリとした表情を変えることなく、大和へと向かっていく。

だが、大和はその時に気づく、少年の能力は発動していない。右手にはまったままの指輪が証拠だ。

だから、まだ逃げれる。そう思うと、大和の行動は早かった。先ほどのような加速は無いが、もともと運動神経は良いほうだった大

和は全力で駆け出す。

「無駄無駄」

しかし、少年は一瞬で大和に追いついていく。

「なっ!？」

「分からない? 君は勝てないよ、力でも使って奇跡でも起こさない限りね」

ドゴッ

そんな音と共に大和は弾き飛ばされる。

「つく……」

当たったのは少年の蹴りのはず、しかし、威力が半端ではない。

だから、大和は少年は力を使用している、それを確信する。

しょうがない。といった表情から一変、大和は少年を睨む。それは今度こそ、戦うことを覚悟した瞳。戦えるかどうかは問題ではない。このまま逃走を図ろうとしようとも、無様に死んでしまうだけなら、死ぬかもしれない、しかし生きるすが在るなら、それは戦うこと。殺さなくてもいい、ただこの場を生き残るために……
「面白いね、君は表情が豊かみたいだ。壊れてない人を見るのも少ないしね」

大和には少年の言っている意味は理解できない。いや、理解するつもりも無い。ただ大和は、力の差が存在し続ける少年に立ち向かうだけ。

「戦うんだね、いいよ。逃げられるよりずっといいよ」

「俺の死に場所はここじゃねえんでな。死ぬわけにはいかねえんだよ!」

「さあって、戦う前に名乗っておこうかな。見ず知らずの人に殺されるのはやでしょ?」

そう言って少年は大和に対し、一礼を行い本当に名乗りだす。

「僕はね〜、シエラだよ〜。君は〜？」

「水月大和」

短く、用件だけを述べる。大和には、シエラと名乗った少年のような、余裕は無い。

今この瞬間も、どうすればいいのかを必死に考えている。しかし、思いつかない。大和が全力で走ろうが、一瞬で追いつかれる。おそらく、立ち向かおうが一瞬で先程のように蹴り飛ばされるだろう。

「止めだよ〜」

小さくそう言う。大和は考えることを止めた、ただ戦う、それだけだ。

シエラは違う、最初から何も考えていない。ただ戦いを楽しむだけ。

「行くよ〜」「やってやるよ!」

同時に駆ける。今度は能力を使っていないのか、大和のほうが少しばかり速い。

いける! そう思った瞬間。大和の背後から、風が吹く。

それに気をとられ、後ろを振り向く。しかし、そこには何も存在しない。

そして大和は気づく、自分の失敗に。

戦いの最中、相手を見失った。それは敗北の一手。

「やあ〜」

気の抜けるような声と正反対に、大和の後頭部へ激しい衝撃が走る。

「……っ!」

後頭部を抑えるが痛みが消えることは無い。

しかし、不意に違和感を感じる。シエラは確かに、大和の正面にいた。それが突然、後頭部へ蹴りを繰り返せる位置に移動した。

高速で移動し、正面からの攻撃ならわかる。しかし、一度敵を見失っていた大和の後頭部など狙う必要が無かった。確かにこの一撃は大きい、だが速さを生かしたまま、腹にでも蹴りをいれてしまえば直ぐにでもダウンしていた。

「無力な君に僕の力についてのヒントをあげよう」

余裕を持っているシエラは、自分の能力を明かすかのように、言い出す。

そんな声を大和は否定することも出来ない。自分が無力なのは確かだから。

「さてさて、ヒント一。僕はどこからでも君の後ろを取れる。今の場所から一瞬でね、君の隣を通る事無くね」

「何でそんなことをするんだ」

大和は当然のことを聞く。大和が無力だからといって、自分の能力を明かすようなバカな真似をする理由を。

「楽しみみたいだよ」。戦いをね」

そんなことをシエラは余裕の笑みを浮かべながら言う。いや、表情自体は初めからまったく変わっていない。

そしてその瞳は大和を見下す。

「後悔すんなよ！俺にヒントを与えることに！」

しかし、一つ目のヒントで、大和は何も理解していない。シエラの能力がなんであるかを。

今度は目をそらさない、大和はシエラを見続ける。

一瞬でも油断すれば、いや、油断することが無くとも攻撃がくればかわせることは無いだろう。だが欠片でも、見つけられるのかもしれない。

「見ても無駄だよ」

そういつた瞬間、シエラは消える。文字通り、今までいたはずの場所から何も残すことなく。

「ヒント二。蹴るのは何も地に付く場所じゃない」

大和は声と同時に横に跳ねる。

瞬間、空間をも切り裂いてしまうような蹴りが横を抜ける。

「つぶね！」

「よく出来ました、じゃあ。どこを移動すれば君の背後に立てるでしょう？」

「ああ？ そんなの横しか……………」

「残念無念、また来週」

言い切る前に、背中に衝撃が走る。

その衝撃に耐え切れずに、大和は前に吹き飛ぶ。

「……………く、そッ！ 何なんだよ、こいつは」

（意味がわかんねえ、こいつの力が。後ろを取れる？ 横を通る移動じゃない？ 一瞬で後ろへ、どうすれば？）

考える、この街に来てから、最低限しか使うことの無かった知識を振り絞り。考える。

「考えてるとこ悪いけど、最後のヒント。足場はどこにも存在する」

（三つのヒント。……………考える、知識を捻り出せ！ 風、それは分かっている。でも、知りたいのは能力じゃない、俺の後ろを一瞬で取ったの方法だ。重力を無視？ 飛んだのか？ いや、跳んだって一瞬じゃ背後は取れない。それに、跳ぶなら横を走ったほうが速い。それよりも速い、あいつの場所から、俺の場所までの最短距離）

大和は思考に没頭してしまふ。

だから、シエラの攻撃をかわせない。

しかし、関係ない。痛みは無視する。シエラのことを知ることを優先する。

止まっていることが無いシエラの手を見て、一番簡単な方法の指輪の確認は出来ない。

「時間切れ、残念。君は失格だ」

そう言っつて、シエラはまた消える。大和に自分の能力を見せつけ

るかのように。

また後ろからの衝撃。
なすすべなく、前に吹き飛ばされる。

今度は止まることの無い連撃。それは全て命中する、正確無比なもの。

しかし、大和は考えることをやめない。止めてしまえば直ぐにでも、地に伏してしまいそうだから……

大和は諦めはしない。逃げることはする、立ち向かうこともする。相手に負けたつていい、だが自分に負けるのは大嫌いだ。自分自身と、自分そして他人の能力を理解する。そんな勝負を行っている。だから負ける訳にはいかない。

だから、考える………………。
ボロボロになろうと関係ない、生きてさえいればいいのだから……

……

「これでおつわり〜」

(そうかよ、風、そんで……………)

ズンッ

それはまるで背中を貫くような一撃。

「……………つく！ 痛てえな。……………でもな、捕まえたぜ！」

その瞬間、大和は痛みを感じる。それと同時に言葉を理解した。大和はシエラの足を掴む。

攻撃が来る場所を理解することが、出来たかのように正確に。ただ、止めることが出来なかったのは、速すぎたから。

「!?!」

「ヒント、ありがとよ。おかげで理解できたぜ。テメエの能力が風の支配で、さつきから俺の背後を取っていたのは空気蹴り、とでも言うのか？ その場の風を、空気を蹴り、瞬間的に方向転換する。

つまり、俺に向かい飛び込んだ後、俺の真上に存在する風を方向転換のために蹴る、そして斜め上へ向かっていたベクトルを俺の背後、その場から斜め下へと変更する。そうすれば横を通ることなく、簡単に背後を取れるんだろ？ 見えねえのはただ速すぎるだけってか、それに背後でもう一回蹴りさえすれば、横に回るより速く一撃を入れ、離脱できるしな」

初めて、シエラは表情を変える。といっても、ただ笑顔をやめただけ。

その状態のまま、大和に話しかける。

「正解、でも風じゃないよ。正確には『疾駆』それが僕の能力。普段は高速移動するためのただの風を纏う力だけど、ただ応用しただけだよ」

「そうか」

「でも分かっても、どうすることも出来ないよね」

「いや、そうでもないぜ。テメエが時間をくれたんでな、いろいろ考えたんだよ」

「何を？」

ニツ、つと笑いながら、シエラに向かい言う。

「この指輪の本質。何で俺が力を使えなかったか、それは簡単だったんだよ。」

「少し聞いてあげよう」

「この指輪は”ミスガルズ”において、俺たちの武器だ。それは心底思う、目的や夢、それを持ったものが使うことが出来る。だからテメエらは使えんだよ、このゲームに勝ち残り、自分の望みを叶えるっていう心底思う夢が。ああ、テメエは戦いを楽しむ、か？ でも俺は違った、俺には別に願いなんで無かった。むしろこの街に来

たことで俺の夢は、目的は消化された。非日常、それが俺の目的だった」

シエラは黙って聞いている。自分たちが使う、指輪の能力、そんなものについて考えたことなど無かったから。

自分たちはいつ、どんな時でも、この能力で戦う。使えないはずなんて無い、そう思っていた。だが違った、シエラや、ほかのプレイヤーは目的を持っていた、だから簡単に使えた。

大和は一息つき、悪態づく。

「それ以外にテメエらの目的は何なのかは知らねえ、聞きたくもねえ」

「それで、目的を持たない君がどうやって、能力を使うの？」

シエラは変わらぬ様子で聞く。

しかし、どうしてそんなことを理解できるのか、シエラには理解できていなかった。でも簡単だ、シエラの目的はただ、楽しみたい。それだけだから。

「目的ならさつき手に入れたさ。そう、このゲームで、俺自身にもテメエ等にも、殺される訳にはいかないんだよ。俺は……………非日常を歩むんだ！」

「そう、きつと楽しいよ、殺し合いなんて異常なゲームは」

そう言っただけで微笑んだシエラは、壊れている。そうにしか見えなかった。

「お前にとつてはな。俺は違う、俺の歩むべき非日常はこんなんじゃない。だから、俺はこのゲームに生き残る。それが俺の目的だ！」

「だから……………」

「だから？」

大和は目を瞑る、戦いの中、目を瞑る行為は自殺も同義かもしれない。

だが関係ない、大和は、生き抜く、戦い抜く、そう決めた。

だから

「そのために、最低限でもいい、だが、戦う為の力を寄せせ！」

「磁砲」!

瞬間、大和の手にあつたはずの指輪は消える。

しかし、大和は何ももっていない。だけど、大和の周り、そこに変化が起こる。

小さい紫電を纏う砂のような物、それが大和の周囲を漂つ。

磁気を起こし、小さく反発しあう帯状になつた砂鉄。

「砂? まあいい……………今度は、第二ラウンドと行こうぜ!」

「楽しめそうだし」

第四話：一つの終幕

薄暗くなり始めた街、”ミズガルズ”

その街の大通りの一つ。理由を知らずに、様々な目的のため殺し合いのゲームに参加している、プレイヤーである二人の人間。一方は嬉しそうな笑みを、もう一方は苦笑を浮かべ対峙する。嬉しそうな笑みを浮かべる白い髪の少年、シエラ。対峙するのは黒い髪を持ち、生き残ると決めた少年、水月大和。

二人が対峙する理由は簡単だ。戦うこと、それがこの街で生き残るための絶対条件だから。

大和は始まった非日常を生き残る、それが目的。シエラは戦いを、このゲームを楽しむ、それが目的。

「第二ラウンドだ」

大和はシエラに言う。嬉しそうな笑みを浮かべながら、それに了承したかのように言葉を放つ。

「フツツ、行くよ、疾駆」

そういつた瞬間、シエラの足は白い風を纏う。それは歩行不可能な場所など存在しない力。

本来はただの逃走用というべき道具。しかし、シエラにとっては立派な武器。

「『磁砲』、やっと来たんだ、少しは力になれよ」

大和を包むのは、小さく紫電を纏う砂鉄。それは大和を守るかのように空中を漂う。

それは大和の考えたとおりに動く、忠実な家臣のよう。

右腕を大きく、横に振る。砂鉄は大和の腕と同時に動き、大和の微々たる動きにもシンクロする。

「こいつは俺の思い通りってか」

それは、大和を裏切らない。忠実に動くもう一つの腕。

紫電を纏う砂鉄は、空気中を漂う。

「引き寄せれるもんあるか？」

大通りの真ん中、この街の住宅の中、何があるのか知らない。
だから回りを見渡す。

「さて、能力も分かったことだし。……………本気で行くよ！」
瞬間、絶やすことの無かった、笑みを……………消す。しかし、表情が
変わった訳じゃない、ただ笑顔を消しただけ。後に残る表情は、『
無』それだけだった。ただ一点を、敵と認識した大和を見つめる。
その瞳は、生きているのかすら問いかけたくなるほど、本質の存在
しない虚無を孕んだようなものだった。

瞳はまるで、人形のように無機質。そういうべき瞳をしていた。
大和は探すことを止める、ただ一点を見る。少年が敵と認識した
自分を見ている。だから大和も敵と認識した少年しか見ない。たと
えそれがどんなものであつたとしても、だ。

タンッ

飛ぶような足音、そして影だけを残し、シエラは消える。

音も無く、一瞬で標的に近づく暗殺者のように……………

シエラにとつての獲物は大和。

「LOW」

声だけが聞こえる。しかし、姿は見えることは無い。見えるのは
速度に負け、残る影のみ。

「速いな、単純に感嘆するぜ」

「まだ一つ目だ」

一つ目、シエラはそう言った。しかし大和は理解できていない、
一つ目、その言葉の意味を。

しかし、考えを振り切る。そして左手を正面へと伸ばす。それと
同時に、集中する。

今、シエラは見えない。なら視界など必要ない、だから目を閉じ
る。そして神経を研ぎ澄ましていく。全ての音を聞く、そんなこと

を行う。

ここで相手を確実に捕らえるために……………

「捕らえた!」

「あっ?」

声と同時に、磁砲という砂鉄は、大和の手より広がり、音を発する世界を飲み込み、シエラを止める。

高速で移動するシエラは、一瞬、人の目では確認することが不可能に近い次元にいた存在。

視界には影しか移らない、だから視界には頼らない。全神経を音に集中した、その結果……………

「マジで捕まったよ」

偶然、大和はそう言った。しかし、本当かどうかは分からない。

「やるねえ、君の能力は砂なのかい?」

変わらぬ『無』の表情で聞く。

本当に本心が分からなくなる。

「俺もまだ、よく理解できてないんでな」

「そう、でも君は強くなりそうだ。聡明だし、理解能力が高い、そして何より躊躇わない。戦いの中、目を瞑ることに、他にもね」
砂でシエラの足を浮き上げ、逆さ吊りになっているまま話す。

「そりゃどうも」

「ああ、だから……………」

シエラは一度言葉を区切る。

大和は理解している、シエラがこれから何を言うのかを。このゲームにおいて、強くなりそうなら、理解能力が高く厄介なら、そんな敵が出来上がってしまう前に……………

「早めに殺そう」

殺す、そう言ってもシエラの『無』の表情は変わらない。むしろ、

少しづつ悦楽の笑みに浸っていく。

そんなシエラに対し、大和も変わらぬ表情で言う。

「俺は死なねえ、テメエを殺す気もねえ」

「甘いよ。それじゃすぐ死ぬよ、いい素質があるのに」

「そんな素質ならいららないな、俺に必要なのは、生きて、この非日常を歩むだけの力と、知識、それだけだ。願いを叶えるために人を殺すのはどこか嫌だ」

「目的を果たすため、人を殺さない？ このゲームで？ 無理だね」

「だろうな、これは偽善だ。本心じゃきつと、望みを叶えるためなら手段は選ぶな。そう言ってるんだだろうな」

皮肉っぽく笑いを浮かべながら、シエラに言う。

そして続ける、自分の意思を

「でもな、俺は殺さねえ、そして生き残る。これも本心だ、変わることは無いと言いつれんが……」

「だったら変えてあげよう、君は人の死を知らない。だから、壊れていない」

「壊れていない？」

「そうさ、このゲームのは壊れている。プレイヤーも、もちろん僕もだ、人間っていうのは一度覚えた快樂はなかなか捨てられない生き物だ」

「快樂、ね」

快樂、それを感じた犯罪者は、一度犯した罪を繰り返す。絶対ではない、しかし、それは元の世界という場所でのこと。この街は違う、普通ではあるはずの無い力を手に入れる。一度はそれを使いたくなる。そして、その強大な力に惹かれ続ける。例外はきわめて異例のはず。

たとえ、大和のように、殺さない、そんな確固たる意思を持つのが、強大な力を持つとうとするだろう。

そんな瞬間、その者はゲームに吞まれる。

「さて、ブレイクタイムは終了。ここからは死の領域だ。

セカンダ
Second」

「そうかよ。だが俺は死なねえ、絶対生きてやる。招待者が作ったプロットも、テメエの望む結果も、全てを狂わし続けていやる」

言い終わると同時、宙吊りになっていたシエラが消える。

しかし、大和は驚かない。分かっていた。こんな簡単に勝てる相手じゃない、と……

そして理解する、先ほど言っていた、一つ目、その意味を。

「加減はしない」

シエラはそう言う。しかし、風に消されその声が届くことは無い。

「速すぎだろ……」

呆然と風を切る音を聞く。しかし、諦めることはしていない、聞く。それだけ。

風を切る音を、方向転換の際の小さな足音を。

雑念を払い、限りなく集中する。

瞬間、背中から身を裂くような激痛が走る。耐え切ることなど出
来ずに、派手に吹き飛ぶ。

「……つんだよ！ 『磁砲』！」

大和は力を呼ぶ、それと同時に小さな紫電を纏う砂鉄は、大和の
着地点を覆う。

そして砂鉄はクッションのように、優しく大和を包む。

「そんな使い方も出来るんだね」

背後からの声、休む暇などくれない。シエラの一撃が大和の頭上
から降り注ぐ、それは風を纏った足での一撃。

カズッ

と、奇妙な音を立てる。

「残念賞だな」

大和はそう言った。

シエラの一撃、それは瞬間に移動した砂鉄によって阻まれる。風が頭上で吹く、しかし砂鉄は、そよ風に煽られはせず、形を崩すことなど無い。帯状になったまま、盾に成り大和を守る。

風は吹き荒れる。しかし、シエラの姿はそこには無い。

「次はこつちだ」

再び背後からの声。次の一撃の来るべき方向を知らせる、余裕に満ちた声。

反射的に大和は声が出たほうへ砂鉄を送る。砂鉄で黒の盾を作り出す。しかし少しの間を置くが、攻撃は来ない。

それを不思議に思い、周りを見ようとし砂鉄を放す。

それと同時に全身を少し下げる。

シエラの蹴りが体へと直撃する。

「……………っ！……………」

大和はその瞬間、自分が飛ばされながらも、シエラの体に砂鉄を這わせる。

「砂が憑いたな」

「それがどうした。何か変わるのか」

シエラは嘲るように言い放つ。そんな言葉に対し、大和もシエラへ言う。

「変わるさ、お前はもう籠の中の鳥だ」

「くはっ！ くはっははははっっ！ そうか」

歪んだ笑い声が響く。

聞いた大和は眉を顰める。”壊れている”シエラはそう言った。しかし、大和は”壊れている”のではなく、純粹に”狂っている”そうとしか思えなかった。

異常な笑い声。初めて微笑から変わった笑い。

「くっくっく。面白いな、一瞬で……………反撃という訳か」

一瞬、それはシエラの一撃の瞬間。大和は瞬時に威力を軽減する

ためポイントをずらした。しかし、成功しなかったのか、激痛は大和を好むかのように付き纏う。

「……………、反撃できても、食らったら意味ねえ」

「やっぱテメエはまだ強くなりそうだ」

「でも殺すんだろっ」

口調の変化など気にしない。ただ、大和は問うだけ。弱者が強者に問いかけるように……

シエラは首を傾けながら、笑う。はじめに見た笑みではなく。狂ったような歪んだ笑み。

「くはっ！ はははははっっ！」

再び笑いは、二人しか存在しない大通りに響く。

そして続ける。

「テメエ次第だ」

再び、シエラは消える。

だが大和は、もう音を聞こうとも、一部を把握しようともしない。いや、する必要が無かった。

「残念だが、独走はここで終わってもらっ」

言葉と同時に、シエラが見える。顔には一瞬の戸惑い、なぜ止まったのか理解できないといった表情。

「『磁砲』行きたきや行け！」

その言葉に、砂鉄は弾かれたかのように、一斉にシエラに襲い掛かる。まるで遠くにあった磁石が、一瞬ですぐ傍に来てくれたかのように、シエラに吸い込まれていく。

「……………っちい！……………」

初めて、シエラが苦痛の声を発する。

聞く間もなく、砂鉄はシエラを黒で染めていく。

「磁力も思い通りか。ってあれ？ やりすぎだったの」

しかし、そんな大和の不安など虚しく。黒は一瞬で吹き飛ぶ。

黒が呑もうとした場所、そこにシエラが立つ。目を閉じ、空を見

上げるような動作を起こす。

「そうか、テメエの能力は磁力か」

理解した。あの一撃だけでシエラは大和の能力を確かに理解した。吹き飛んでいた砂鉄が再び大和の周囲を漂いだす。

「だが……もう関係ない。Third^{サード}」

再び、シエラは消える。今度は影すら残さない。

「無駄。そしてもう、殺す……」

背中に強烈な一撃、前に吹き飛ばされ、地面に砂鉄を敷き再び衝撃を消そうとする。

「もう、止めない」

地面に近づく前、シエラの一撃が再び襲う。

「……………つく!……………」

今度は前から、倒れる瞬間の重力が混じり、今までとは桁違いの衝撃が伝う。

「一瞬で……………堕ちろ!」

大和の体が後ろに仰け反る、そのまま倒れこむのを赦さないかの如く、頭に空間を裂くような蹴りが襲い掛かる。

「……………くっ!……………、んなろっ! やられっ放しで行くかっつての!」

砂鉄で頭を守る。

「無意味だ」

瞬間、蹴りの異常な風圧からか砂鉄が吹き飛ぶ。磁力で集まっているものではないためか簡単に吹き飛んでしまう。

大和は目を見開く。

(殺られる!)

「容赦は、……………無しだ」

蹴りは大和の頭を穿つ。

ゴトッ

無然としていたシエラは歪んだ笑みから『無』の表情へ、『無』から、初めの笑みを取り戻す。

「フフツ、面白いね。君ならいいかも」

口調が元に戻る。

そして、シエラは消える。

「これが最後だよ」

側面からの強襲、しかし、焦ることなく対処する。

紫電を纏う砂鉄は大和を守る。

「あゝあ、楽しかった」

「まったく楽しくねえ」

それは正反対の意見。

「君は僕を殺さないんだよね、うつん殺せないか」

「正直イライラ、するが、殺せねえ」

「だね、なら僕も君を生かしてあげよう」

予想をしていなかった答え。大和は純粹に驚く。

戦いを楽しむシエラ、それが今自分を逃がすといった。

「帰るよ、でもね」

一度区切り、笑みを消してから、言い放つ。

「強く。俺以外に殺されるな。次にあつたとき、テメエはただ俺の飢えを満たせばいい」

そういつてシエラは消えた。今度は本当に、遠くへ去った。

大和は独りになった後、大通りに倒れ込み、呟く。

「飢え、ね。ま、正直、逃がしてくれてありがてえ……………無理あつた、実際、もろ食らつた、し……………」

大和は目を閉じる、闇に墮ちるかのように静かに。

（正直、一瞬であんなこと出来るか！ もろ食らつたぞ。理論だけならいけるんだが。ああ、能力を完璧に把握しねえと、死ぬなこり

や)
考えているうちに、睡魔が襲う。激痛を走った全身に心地の良い感覚。目を閉じているとすぐに眠れる。

この場がどんなものか、もうある程度は把握しているはずなのに、大和は無防備のまま寝付く。

プレイヤーは五萬という。その中で大和が戦ったのは三人。初めてゲーム参加したこの日。大和は吸い込まれていくかのように意識を落としていく。

『磁砲』は消えない、大和を分かっているのか、周りを漂う。そして、まるで大和の存在を隠すかのように黒く、深く染めていく。後に残るのは中に大和が眠る、微かな紫電を纏う黒い砂鉄の塊だけ……………

「ふ〜ん、生きてるんだ。あいつと戦って、ね〜」
砂鉄の塊を見据える目が二つ。

「……………使えるかもねん」
二ツ、と笑いながら塊に手を伸ばす。

大和が眠る場所より遙か遠く、全く変わらない大通りの一場所。

そんな場所で爆ぜる焔が存在する。爆ぜた焔は赤い粉塵を残し空気に舞う。

粉塵の中心、焔が生み出る場所で狂ったような声の一つ。

「ヤット九人メ、アト百人近く殺せば、我の優勝ダ。アア、楽しみダ！ コンナにモそそルことハ無い」

”壊れている”とも”狂っている”とも当てはまらないような不気味な嘲笑。それはただ、”闘いに飢えている”もうすでに人ではない、そんな気を起こさせる。戦いを楽しむのではない、惨殺を快樂にする。

「サア、十人メはドンナ奴ダるウ。快樂ヲ覚エル、飢エガ満たさレル、死ヲ恐怖シタ瞬間、ソナナ極上の叫びヲ聞こウ」

ジュルリ、そんな音を放ちながら、赤髪をした、充血しきったような紅い瞳を持つ男は歩いていく。

「ソソる。早く喰らいタイ」

”飢え”そして、”狂喜”を孕む男は歩く。ただ自分の快樂を求めて、ただ自分の飢えを癒すために。

男は大和とは違う道を行った……………

鏡の前で頭を抱え、身を擦じらせながら、呻いている大和。傍から見るとただの異常な人でしかない。しかし、そんなことを気にしている余裕は存在していないようだ。むしろ、シエラとの戦いの時のほうが余裕があったように思えてくる。

時々、自分が寝ていたベッドで眠っている少女を見る。挙動不審、まさにそんな言葉がお似合いな様子。

「むいむい、寒い。むい」

時折聞こえる寝言に敏感に反応する大和。言葉を聞いてはいないが、音に敏感に反応する。その姿は金属音に反応する猫のようだ。

先ほど覗き込んでいた鏡にもたれながら、床に腰を下ろす。

そして

（俺は何をしてしまったんだろう？）

などと、考え始め、不意に声を漏らす。

「はあ、なんだよこれ」

「寒」

ハッ、として少女の声をはじめて聞いた。今まで気が動転しすぎており、聞こえるものも聞こえなくなっていたようだった。

少女は言葉通りか、少しばかり身震いしていた。そうだろう、大和は派手に布団を剥いだのだから。

同時に不思議に感じる事が出てきたのか、首を捻り訝しそうな顔をする。

（夏の朝ってこんなに寒かったけ？　ここは季節も適当なのか？）

昨日まで、夏の暑い朝で目を覚ましていた。しかし、今は苦にもならないむしろ涼しい位の朝。分からない事は色々あるようだ、といった感じで一人で納得し、頷く。

そして、不意にもう一度聞こえた声で考えから抜け出す。

もう一度、布団をかけようと、少女の眠るベッドに近づく。そろそろ歩きで、無音で歩く。やっぱり傍から見れば少女を襲おうとしているようにしか見えない。

「違う！　やましい事は何も無い………はずだ」

首が飛んでいってしまうのではないか、と思うほど激しく振りながらベッドに近づく。

ベッドを見下ろし、ゴクリッ、といった効果音が聞こえる。

「だから違う！ やましくは無い、そして勝手に変なことを付け加えるな！」

効果音は聞こえないが、ベッドを見下ろす。

見えるのは、寒いからか大和によって、剥ぎ取られた布団をまるで抱き枕のように丸め、抱きしめている少女。日本人だろう黒のしばかり長そつな髪が乱れ、布団の下敷きになっていた。歳は高三の大和より、だいぶ低いくらいに見える。

(中学生か?)

そう思いながら。どうしようと首を傾げながら。少女を上からまじまじと観察する。

「おい、この文、撤回しろ！」

ちらちら観察する。

「もう一回！」

なめるように観察する。

「それこそ訂正すべきだろ！」

生足に息を呑みながら観察する。

「ただの変態じゃねえか！ 撤回しろ！」

布団をかけるの不可能そつなので、仕方なく、ベッドから離れる。

…………… 本当に残念そつに。

「そろそろ真面目にしゃがれ！」

もう一度、鏡の前に立ち、映された自分を見る。

見れば、着ていた制服は所々破れていた。本当にこの街で戦いがある、それを証明するかのような制服になっていた。

髪は寝癖か、好き放題に跳ねている。それを手で少し直しながら、床に寝そべる。

「満漢全席」

突然、そんなことを口にする少女。

幸せそうな寝顔、夢の中でそれを本当に食べているのかもしれない。しかし、大和はこんな状況のなか平常心でいることが出来ていない。

「非日常すぎだよ。これは予定外だ、いや殺し合いも予定外だが、これのほうか、いや待てよ……………というか何でこんな状況に……………」
思考がだんだん混乱していく。考えていることが意味の分からないものになってきていた。

大和は頭を抱えながら、首を擦じらせる。

そして、唐突に声が聞こえる。

「むいゝ、よく寝たね」

小さな体を起こし、大きな伸びをし、天井に向かって手を伸ばす……………大和と同じ、所々、破れたりしている制服だろう服を、乱されたかのように着ている少女。

大和は顔を赤くし、すぐさま少女から目を離し、違う場所を見る。
(んだよこの、変な展開は！ ゲームかよ……………あ、いやゲームか)
向きを変えた方がいいが、見た先にあつたのは、先ほど自分を映した鏡。

つまり、向きを変えようが意味は無かった。大和が寝そべったままのせいだ、鏡からは少女の姿が見えてしまう。

「にはは、起きたね」。よつと

乱れた制服を直しながら、ベッドから飛んだ少女が大和に言う。

「君はゲームの参加者だよねん？」

内心は今にも逃げ出したくなるような気分だったが、必死に平常心を装い。体を起こして、座り込むと、答える。

「……………ああ、そつだ。昨日来たばかり」

知られて困るかもしれない情報をすぐに言ってしまう大和。表面上は平静を装うが、本当に内心としては相当焦ってはいるようだ。

しかし、顔には出さず、心理の中に押し込める。自分の表情に嘘

をつくのは得意だった。つまらない日常の中、無駄な付き合いでも得るために自分の表情を、感情を偽っていたから。

不意に声が聞こえ、少女がいるであろう場所へと普通に向き直る。

急に目の前に現われたのは少女の顔。

「……………近い！ 急に近づけるな！」

「君が振り向いたからだよん」

「やはは、と笑いながら、答える少女。

大きく深呼吸し、少女に尋ねる。初めから自分の気になっていたことを、簡潔に……………

「何で俺はここに居るんだ？」

「それは君がよく知ってるんじゃないかによ」

「語尾が……………じゃなくて、俺がこの街に来た理由じゃなくて、俺がここに居る理由だ」

「あんなところで寝てると君が死ぬから」

「このゲームは他の人間を消すんじゃないのか？」

「あたしはここに来て一週間、一人も殺したことなくないよん」
少女はそう言う。

一週間、そんな時間をこの街で生きている。だが、人を殺さない、壊れていない。何か確固たる意思を持つのだろう、だがそれは大和には分からないこと。

「それで、頼みごとがあるのねん」

頼みごと。大通りの真ん中で寝ている、昨日来たばかりと言った大和に対して。

「何で俺？」

当然、不思議に思う。一週間、その短くも長い時間をこの街で生きてきた少女が、昨日来たばかりの大和に頼むことなどあるのだろうか。

しかし、少女は笑いながら、言う。

「君はシエラと戦って生きてるよねえ」

さも、知っていて当然のように言ってくる。

しかし、あの瞬間、大和は近くに存在する少女など知らない。

それは大和が気付かなかっただけなのかもしれないが、あのシエラが気づかずに帰るなんて事は無かつただろう。あれほど戦いを楽しもうとする人間だ、少しの異質なものだって気づきそうだ。

「何で知ってたんだ？」

大和自身でもわからないほど、声は少し低くなった。

それでも、少女はお惚けたような表情から変えない。

「見てたからだよん、あたしの能力でね」

「能力？」

「そうっさ、『銃士』」

少女は能力の名前であろう単語を声に発する。

指輪がどこにあるか、それは分からないかったが、少女の手には一メートル以上はあろう銃。

「『ヘカートIE』 全長1380mm、最大射程距離1600mくらい、アンチ・マテリアル スナイパーライフルらしいよん」

「な、何でそんなこと？」

「さあね、もってたら判っちゃうんだな。指輪の気遣いってやつだね。あたしは接近戦が苦手だから、このスコープで見た訳さ」

もう一度笑いながら、持っていた、『ヘカートIE』を指輪に戻す。

重さも十キロ近くあるらしく、片手で持っているには辛いらしい。

「何で能力を俺に教えるんだよ」

この殺し合いのゲームで自分の能力を知られることは、自分の行動を一つを教えているようなものはず。しかし少女は迷うことなく大和に能力である銃を見せてきた。それどころか、自分が近距離での戦いを好まないことも。

自分を不利に追い込んでいる。それでも少女は笑っていた。

まるで、大和は自分と戦わない、そう分かっているかのよう。

「頼みごとって言うのは相談、君はあたしと手を組まないかい？
一時だけでも良いよん」

手を組む。確かに少女はそう言った。

「それはシエラと戦った俺が使えるから、か？」

「嘘つくのはめんどくさいから、正直に言うよん。そう、君が使える
そうだからだよん」

「何になんだ？」

「気にしてくれるの？」

言葉と同時に近づけていた少女の顔を押し戻しながら、スツと横
を向く。

「用件次第だ」

「にやはは、気になるんだ」

「早く言えよ」

「にやはは、あたしの目的はねえ、ある人間を戦闘不能にするこ
と」

戦闘不能、その言葉を聞いたと同時に、大和はきつぱり、躊躇い
もなく。

「断る」

言った。そして、木造の扉がある場所へと歩いていこうとする。

このゲームで生き残る、だけど、人を殺すことはしない。シエラ
との戦いの際、大和が自身の中で決めたこと。

だから、戦うことはする、でも殺すことはない。

「早いよ、ちよつとは聞こうよ」

「無理だ、人を殺すことなら御免でな。俺は誰も殺したくない」

言っつて、不意に少女の言葉を思い出した。

少女は、『ここに来て、殺したことなんてない』、確かにそう言
っていた。その少女が人を殺すために自分を誘うのだろうか？ し
かし、この街は無法地帯、殺し合いでしか生きることが出来ない。
そんな考えが頭の中で交じり合う。

もう少し、もう少しだけ聞こう。頭で感じ取り、大和は踏みとど

まり、振り返る。

「理由は？ あんたは殺したことなんて無い。と言っていた。なのに何でそいつを殺そうとするんだ？」

「少しは聞いてくれるみたいだねん」

「ああ」

長話にでもなるのか、少女は近くの椅子を引いて大和に座るように促す。

大和が座ったのを確認すると、自分も同じく椅子を探すが、無かつたのか、少し辺りを見回してからベッドに腰掛ける。

それを見ると、ここで少女が住んでいるのではないという事は判った。

大和はあたりを見渡し、この部屋にあるものを見る。

ベッド、一つの椅子、小さな机、等身大の鏡、窓にかかるカーテン。

大和は、この場所がゲームの主催者が最低限の物を用意でもしていた家であることを悟る。

大和が少女の方へと視点を戻すと、待っていたかのように少女は話し出す。

「あたしの目標はね、二日前、つまり君が来た前の日。その日に来たはずの男を戦闘不能にすること」

「その理由だ、何で戦闘不能にする必要がある？ 確かにこの街の人間は全て敵だが、あんたは殺さない、そう言っただろう」

「言ったねえ、でもさ。あたしのやることは例外だよ、実際のゲームで言うのなら、製作者の見落としを見つけた。とでも言うよん。それでそいつを放っておけば死者が異常に増える一方だね。だから、そんな人を増やす前にやろうってわけっさ」

「異常に？」

「あたしの知る限り、この人はこの二日だけで九人を殺したのさ。記録更新の困ったさんなんだね」

「どうして判る、って見てたのか。でも、結局戦うと殺すんだろ？」

「普通はそうだけであたしは違うよ、さっきも言ったけど、見落としを見つけた、だから殺さない。だけど殺さず消す」

大和は、少女の言ったことを理解できない、そういった困惑した表情で考え込む。

「簡単さ、人を殺さず、指輪を破壊すればいい。そうすれば能力によつての死者は減る。それでその人を捕獲して、プレイヤー全員でこの街からの脱出を図るのだ」

単純に大和は興味を引かれた。

どう脱出するかは判らないが、殺し合いのゲームの中、殺さず、力だけを奪い、全員での脱出を図る。人が死なない、生き残る、それが一番望んでいた結果になるかもしれない方法。

しかし、大和の中で喜びと同時に悲しみが混じった。

手に入れることが出来た非日常が終わること、それが嫌だった

「ちなみにまだ二人しか保護してないわけだけど、あたしの能力なら出来なくはないから、がんばろうかなって思うわけだよ」

そんなことを一人で行う少女。当然ながら、普通のプレイヤーは手伝わないだろう、自分の夢を、目的を叶えるために殺しあっているのだから。その目的が無くなるのは許せないのだから。

だが大和は違う。大和の目的は非日常を歩むこと。考えると同時に思う、目の前の少女はどうなのだろう、と。

「何でだ、ここにいてってことは、あんたには自分の夢があるんじゃないのか」

「にえ？ あたしの夢？ ……………ここじゃどうやっても叶わないよ、あたしの夢はこの街には無いもん。だから戻らなきゃいけない、あたしが生きるべき世界に……………」

突然、影を帯びたように暗く雰囲気が変わった少女。

それ見ると、本当はこんな場所には来たくなかった、そう絶望しているようにも見える。悲しげな表情。

「でも、それは不可能に近い理想だな」

「……………そう、だけど……………」

真剣な表情で、その少女の考えた方法を否定するかのような言葉を吹きかける。

言葉から、少女の表情はだんだん、沈んでいく。

「……………だけど、やってやる。その理想の手伝いくらいはしてやる、俺もこの非日常を出るのは嫌だが、殺しあうのはもつと嫌だしな」

「え？」

「詳しく説明しろ、どうすればいい」

少女の表情は明るくなる。まるで欲しかったおもちゃを買ってもらった子供のように。

「うん！ 手伝いたまえ」

「偉そうにすんな」

「名前、なんていうの？ これから一時とはいえ、一緒に行動するんだ、教えてまえ」

「大和だ、水月大和」

「いい名前だ、……………ん？ そうでもないかな？ まあ言いや、あたしは遠坂希思だよん」

その名前を聞いた瞬間、大和は思いついたことをそのまま言う。

「変な名前」

「にやにお、人の名前を侮辱するにや！ 大和だって戦艦みたいじゃにやいか」

「全国の大和さんを否定したな！ ていうか、その語尾が本来のものか」

大和がそういった瞬間、ねこ子は大和に飛びつく。しかし、大和はすぐにそれを避け、部屋の中を逃げ回る。

必死に大和の言葉を否定しながら、部屋の中を逃げ回る大和を追いかけている。

殺し合いのゲームが続く街のある一軒家の下、そんな殺し合いとは無関係のことが起こっている。

— つの穏やかな非日常………

第六話：炎の殺戮者

「 というわけっさ、……………ちゃんと聞いてた? 」

木造の一室の中、少女、希思は大和と向かって話をしていた。その大和は顔にいろんな傷を作って座りながら話を聞いていた。

数分前、大和は希思、という名前に対し、『変な名前』と言った。その後、二人の狭い部屋の中での追跡劇が始まった。結果としては大和が、少し伸びた希思の爪で顔中を引っ搔かれて静かに倒れ付して終結した。

そのせいか、希思がいろいろ話していたのだが、大和の耳にはまったく入っていない。

「 聞いてなかった 」

大和は嘘をついても仕方がない、といった感じで正直に答える。そんな大和に対し、希思は少し怒りながら笑っている。

「 仕方がないから、もう一回説明してあげよ 」

「 仕方がないって、お前のせいじゃ 」

言い切る前に希思の睨むような視線が大和を指し、大和は押し黙る。

綺麗な薔薇には棘があるとはこの事だろうか……………

「 説明するよう、今度は聞くんだよ。まずは対象のことだね、

」

名前は白樫一陽^{しろかしこいちよう}、って言うらしくて、髪が真っ赤で目も充血した感じの赤。

少し猫背みたいだけど、その時の背はあたしより30cmくらい上で大和と同じくらいだね。それと能力はよく分かかってないけど、たぶん炎、もしくは赤い粉塵。それで特徴的なのは言動と行動、このゲームでいろんな人を見てきたあたしだけ、あいつは異常だよ。殺すことを楽しんでいる、それだけならまだいるけど、戦いを欲して楽しむを通り越してる。恐怖の悲鳴に、絶望の表情に快樂を得よ

うとしているみたい。

「まさに”狂気”だね、と言うわけかわかった？」

希思はいつの間にか手にしていた書類らしき紙をしまいながら、大和に聞いてくる。

「まず聞きたいことがあったのか、間髪いれずに問いかけてくる。

「どこでその情報が手に入ったんだ？」

「あたしの分析だよん、見て、後は読唇術だよ！」

親指を天井に向けて突き上げ、グーの形で大和に向かって手を差し出す。

「読唇術って……………何もんだよこいつ」

小さく、聞こえないような声でつぶやく。

「失敬だな君は、ちょっと特別な理由があったんだい！」

ちなみに耳もいよいよで、小さな呟きすらも聞こえてしまうようだ。そして、大和の頭に強烈な手刀が飛ぶ。

大和は悶絶しながら、その瞬間に希思の前で悪口は止めよう。そう誓ったのでした。

「それはいいとして、おまえ、何でそいつの観察してんだ？ 二日だろ、そんな短い間で、どうしてそいつが危ないって分かったんだ？」

「たまたま、案内人と話すところをみたのだ、手伝いを探してたのさで、観察してたら……………って訳だよ」

「それで正確な人数が？」

「しばらく観察してたからねん、ちなみに観察してるときに反対を見ると大和とシエラがいたんだなこれが。また、あのシエラか、とか思っただけ観察してると大和を殺さず消えちゃったんだ。だから使えるかもって思ったのさ」

「それで、そいつの監視を止めて俺を助けた、という訳か」

希思は静かに首を上下に振って、頷く。

大和は聞いていて希思の言葉の中で、少し気になったものを質問する。

「あの、シエラ？ って、あいつはそんなに有名なの？」

大和が戦った、シエラという少年。その病的なまでに白い髪をした少年を希思は知っているかのように話していた。

「有名、かな？ あれは殺しを楽しんでいる、一陽と同じくらいにでも、それと同時にあれは自分が興味を持った人間は殺さないんだよね、如何してだかはよく分かんないけど」

興味を持つ、大和もシエラという少年に興味を持たれ、生かされた。それは間違いないだろう、あの瞬間、いつでもシエラは大和を殺すことなど出来たのだから……

「んじゃ、もう一つ質問」

「何？」

「シエラやあんた、希思はどうやって生きてきたんだ？」

希思はよく言葉の意味が理解できないのか、首をかしげる。分からない、だから、大和から続く言葉を待つ。

「食欲、それに睡眠はどうするんだ？ 今の俺みたいに、あんたが傍にいるわけじゃないだろう？」

やっと納得したのか、大和の質問に簡単に答える。

「食欲は大丈夫だよ、ゲームの主催者の用意か、あらゆる食材がいりんな場所においてあるんだね。睡眠は始めの方は全然寝れなかったよ、疲れて寝る以外はね」

今は大丈夫だけど。と付け加えると、希思は不意に立ち上がると、二つある扉の一つに向かっていく。

急に行動をとった希思を不思議に思うと、率直に聞く。

「どこ行くんだ？」

しかし、返ってくる答えは

「気になる？ でも教えてあげないよん、十分くらい待つんだにや」

大和を焦らすかのようにそう言って、扉の中に消えていく。不信に思っただけに近づくのだが、なにやら異様なオーラっぽいものが漂っているためか、大和はすぐに戻ってベッドに飛び込む。

木造の家の中、何故かふかふかであるベッドの上で大の字になり、思考をめぐらす。

(殺さずに勝つ、ね。結構じゃねえか、やってやろう。……………それにして)

ぐうぐう

狭い部屋の中に響く大和の腹の虫。シエラの攻撃にも、希思の手刀にも耐えることが出来た大和だが。空腹には勝てないらしく、ベッドの上で動く気力も無くし、目が虚ろになってきていた。

「……………無理……………死ぬ、空腹で……………結構、アピールしたのに……………食欲はどうするとか……………とりあえず、あいつの前じゃ……………我慢してたが、やばい。ガクウ」

効果音を自分で言うぐらいの余裕はあったらしいが、ベッドに突っ伏す大和はいつの前にもまた睡魔に吞まれていく。

「出来たぞん」

そんな声と同時に扉の中から出てくる希思が、初めに見たものはベッドの上で死体のようにうつ伏せになり、静かに眠る大和だった。希思の手には小さなお盆が二つ存在していたが、自分がそこに存在しているものを作っている間にうとうと寝る大和に対し、ふつふつと怒りがこみ上げてくるようで、整った顔がだんだん般若のようなおぞましい表情に変わっていく。

「君は何寝てるか！ せつかくご飯を作ってたというのに！ もう知らない、あたしが全部食べてやるもん」

「飯！？ 何処だ何処にある」

「ご飯という単語を聞いた瞬間に飛び上がる大和。」

飛び上がった瞬間、希思の手にあったお盆が頭に飛んでくる。

「あでっ！」

「君の分さー！」

と言つても、もう既にお盆の上には何も載っていない。

「あの〜、希思さん？ 何にも……………」

「君にはお似合いだよ！」

「んな馬鹿な〜。腹が減つては戦は……………」

「君が寝てるからだ」

「いや、でも」

「さつさと食べるのだ、直ぐにでも奴を探さねば」

大和の言葉をことごとく切りながら、さつさと自分の持っていたもう一つのお盆の上の料理を食べていく。

一方、大和のほうは器用に空中で取った茶碗を一杯だけもって、傍に落ちた箸を拾い、ひもじく食べていた。

ちなみにそれが無くなった後、希思にもう一度、作って欲しいとお願いしていたのは言うまでもない。

「つさ出発だよ、見失つた奴を発見しなければ。いくぞう」

グーにした手を掲げて気合を入れなおす希思に対し、大和は頷きながら了承する。

「よっし、腹も満たされたし、少しは手伝つてやるよ！」

二人の一陽という殺戮者の搜索劇の始まり……………」

この街にも太陽はある、月だって存在している。根本的には元の世界と同じ概念が存在している。そんな変わらぬ太陽の下、大通りから少しばかり外れた道を歩く青年が一人。そこは人が四人、いや三人ほどしか通れないような狭く小さい道。

しかし、一人で通る分にはまったく問題など無い。

その場所を歩くように彷徨うのは一人の青年。黒の髪に血をそのままかけてしまったような異質な赤黒い髪。

そして、それとは裏腹に綺麗な海水を吸い込んだかのような青色の瞳をしている。

そんな正反対な色である、赤と青の色を持ち、その場に立っているだけで異性を魅了するような容姿をしている、穏やかな表情をする青年。

「青年も”ミズガルズ”のゲームの参加者、二日前にこの街に来た、まだ大和と変わらないほど、この場所に関する知識を持たないが、すぐにこの状況を理解し、自分の戦う理由を示した。

『飢えを満たす』、それが青年の目的。それはこのゲームに勝ち残ろうが関係ないことだった。簡単だ青年が求めている飢えは、このゲームの中で簡単に満たせる。それが完全に満たせるのかどうかは分からないが……。

「見つけた」

青年は自分の歩く道の先を見る。その場にいたのは、一人の少年、このゲームの参加者。

青年の声が聞こえたのか、少年は振り返る。そして、迷うことなく自分の能力の、指輪の名を叫ぶ。

何時このゲームに参加したのかは分からないが、この少年はゲームを理解している、油断をすればいつ死ぬのか分からないということも

「『ほうそう銃す』！」

指輪の名を呼んだ瞬間、少年の両手には、身長を越える、2mを越えるほどの槍のようなものが出現した。

槍、といつても、その穂先には斧頭、そしてその反対側には突起ビックが取り付けられている。それは鉾槍、ハルベルトという名のもの。用途の広さが特徴的なポールウエポンの完成形といつても過言ではない武器。

その生成が少年の能力。何か特別な訓練でも受けなければ使えそうもない槍だが、少年は熟達した槍士のようなそんな感じを醸し出している。

油断の無い構えを取ったまま、迷い無く攻撃を開始する。

「殺しはしたくないが、仕方ないんだ……………行くぞっ！」

「……………」

少年は青年に向かって跳躍という一步で自分の間合いを取る。そのまま速度を殺さぬうちに、矢を引くかのように引かれた右腕を解放する。

少年の持った槍は空気を裂き、異様な音と共に青年へと突き出される。

それはまさに神速の一手。

空気すらも切り裂き、絶対無比な速度で相手を貫く……………はずだった。

「……………なっ！」

紙一重、そういうべきなのか、青年はわずかな動きだけで、先端の斧頭を避けていた。

瞬間、少年は反撃を恐れ、無防備になった右腕と同時に槍を引き、体を守ろうと前に構える。

が、反撃など来なかった。

青年の青い瞳は少年を見ていない。どこを見ているのか分からない、しかし、少年が青年の瞳を覗き込んだ瞬間、全身に嫌というほどの殺気というものを感じた。

（何だこいつは？ この異様な感じは……………？ ボクはこいつが怖いのか？）

少年は考える。しかし、考えれば考えるほど、青年に対しての恐怖が浮かんでくる。しかし同時に、自分に対し、『見つけた』、と言いながら戦おうとする気配がまったくもってないことに対し、憤怒の念を抱いていた。

そう考えていると、突然ねじが切れた人形のように、ギシギシと首を傾けていく。

「飢えを満たすか？」

ゆっくり、首をほぼ九十度に曲げ切ると、青年は少年に対して聞いてくる。

その問いも、少年にとって意味の分からないもの、見ていると、九十度まで曲がった首が青年の異常さをいつそう際立てているようだった。

少年は自分の中で恐怖という感情が、異常なまでに際立ってくるのが分かった。その感覚を振り切るために、槍を構える。

「今度は、一撃で葬る！」

そういつた瞬間、少年は駆ける。

少年の中で、殺したくないなどという感情は無くなった。一撃で青年を殺すために、自分の手を、まるでしなる弓のように大きく引いた。

今度こそ、青年を貫く。そんな絶対な一撃をくり出すために。

「ア　ああああアアア……………」

青年は無慈悲なまま迫る一撃を、まるで無視するかのようになり、震えながらも叫びだす。その声は異常で、まるで呪詛のような、気味の悪い感じがする声。

少年は頭が何かに支配されそうな感覚に囚われ、とっさに攻撃を止めて、耳をふさぐ。耳障りな、鼓膜にすら異常をきたしそうな声をさえぎる。

同時に距離を持つ、少年の渾身の一撃は能力ではなく、ただの気味の悪い声で躊躇われた。

「何だよ！　こんなやつ、直ぐに……………」

少年は目を見開く。

そして、目の前の異常な光景に目を奪われる。

その瞬間に青年の瞳が、綺麗な海水を吸い込んだような青い色から、まるで充血しきったかのような真っ赤な色に変わっていくのを見たのだから。

(気味が悪い、……………早く、早くだ)

少年はあせる。本来ならもう自分の足元に付しているはずだった、無防備で簡単に殺せる人間だったはず、そんな奴が目の前で、異様な光景を見せている。

少年には少しの自負があった。この街に来てから、いろんな人間を下した、もちろん殺すこともあったし、致命傷を負わせ放っておいたこともあった。

武器を持つたびに自分の槍についての知識を得れた。それが能力であることは知っていた、だが知識を得たのは事実だから、と少年はたかを括っていた。知識があり、それ相應の行動が出来る。だからそれにさえ従えば簡単に負けるはずが無い、と。

しかし、今の目の前の状況は違う。青年はそんな少年の自信を完全に崩した。負けるはずが無い、そんな少年の考えを一瞬で砕いた。それが青年がやるうとしてやったことかはわからないが……………

青年の瞳が完全に赤になると、震えていた体が戻り。傾いていた首を戻していく。

「キカツカカカ！」

聞いたことも無いような、異様な笑い声のようなものが聞こえる。笑い声とは言いがたい、いや人間の放つ言葉で無いような声だった。

少年は無意識のうちに恐怖を感じ、後ずさっていく。

「何だ、止まれよ、行くだ。あいつを殺すんだよ！」

少年は震える自分に言い聞かせながら、自分の足を叩く。

自分の意志で動かなくなってしまった足を……………

「サア、才前八、飢えヲ満たせるか」

急に声のトーンも、口調も変わる。確かにしつかり聞いていたわけじゃない、だがこんなに不気味さを漂わせているような声ではなかった。

「殺ソウ、殺せバ分かる、『しんえん 侵炎』」

片言の中、青年は自分の能力である名前を言う。

それと同時に指輪は光を発する。

「……………つく!……………」

目を閉じ、顔を背ける。そうでもしなければ、それだけで失明してしまいそんな強烈な閃光。

目を開けた瞬間、その場は変わっていた。まだ日光が差し、暑い昼の天気だったはずだったが。それが一瞬にして真っ赤な粉塵で所々、太陽の光が遮られる。

「赤い、……………粉?」

真っ赤な粉塵が少年の周りを漂い始める。

「一瞬ダ、爆ゼルダけ」

そう聞いた瞬間、少年の右腕が爆ぜ、宿主をなくした腕は宙へと舞った。

少年が理解し、悲鳴を上げるより速く、同じように左腕が爆ぜる。

爆発と同時に腕を焼かれたのか、まったく血が出ることは無かった。しかし、それがその場の異常さを際立てている。

腕の無い少年、血を出すことも無く、ただ目を大きく見開いていた。

「……………うわあああああああああ!……………」

青年の能力であろう赤い粉塵の中で、腕を失った少年の悲痛な叫びが響く。だが、その場において、少年の叫びは赤き粉塵の再度聞こえた爆音によってかき消される。

爆発したのは少年の周囲だったが、熱波は少年を襲う。同時に少年のいる場所の空気が一気に高温度となっていく。

「モツとダ、モツと叫べ。ソレが飢えヲ満たす」

「な、なんだよ……………お前えっ!!」

「我か？ 簡単ダ、タダ飢えた人間ダ」

そう言つて、少年の足元に目をやる。まるで悪魔が狙いを定めたかのよう……………

一瞬の間を置き、ぱちんっ、と指を鳴らす。

その音を掻き消すように爆音は響き、少年が見るより速く、悪魔に魅入られた右足は爆ぜ、無くなっていた。

ガクンツ、と重心を崩し、片膝を地面にあて、無くなった部分をもう一度見る。

右足は太ももの部分から無くなっている、だが、そこから血が出ることは無かった。爆発と同時に肉を焼かれ、止血されたようになっている。

「何で……………何で……………僕の」

そう言つて、無惨にも肘までとなった左手を必死に使い、この場から逃げ出そうと、這い出す。

その時から、青年は少年への興味をなくす。

「逃げ出スナ、弱者が、……………お前じゃ飢エ八満たせソウに無イ」

青年がそう言っている間に、少年の残された左足は跡形も無く、爆発と共に無くなった。

それでもなお、この場から逃げようとする少年は肘だけの左手で、必死で体を引きずる。

その瞬間、少年は気付けなかった。自分の背中に、全身を包み込むような赤き羽が存在していることに……………

「セメテ、死ノ瞬間の声ハイ音を奏で口！」

青年そう言う。

「うああああっ!!!!!!」

少年の絶叫の悲鳴。まだ生きたいと願う少年の懇願をこめた必死な悲鳴。

それをあざ笑うかのように、少年の背中に存在していた羽が、大きく震え、少年を包み込み……爆ぜた。

上半身が完全に吹き飛び、残された下半身は血を噴き出すことも出来ずに、ただビクビクと痙攣のような行動を繰り返し、……数秒後に全く動かなくなった。

赤き粉塵は少年の上半身が吹き飛んだ瞬間の大量の血を浴び、さらに濃い赤へと染まっていくように見えた。

「クカカカ、マダダ、まだ満たされナイ」

青年は既に少年への興味は無くなっている。青年の中では少年は、悲鳴を聞く。その為だけに用意されていた餌でしかなかった。

食べきってしまったえば直ぐにでも忘れ去るような……

「次ダ、キツと飢えガ満たサレる」

重心を前に持って、猫背のまままで道を歩き、大通りに出ると、不意に見つけた狭い道へと入っていく。

その表情には少しの満足感が存在していた。しかし、満足感よりも遙かに、満たされない飢えに対する不満感が存在していた。

青年は飢えを満たすために殺し続ける。

”狂喜”をはらんだ青年の名は白檜しろかしのちよう一陽、希思、そして大和が追うと決めた存在。

それは大和達のいる大通りを遠くはなれ、快樂を探し、殺している。

殺戮、それは異常なまでに飢えた一陽の、唯一の娯楽といふべき
楽しみ事……

第七話：共闘作戦開始！

鉄骨の森、そんな言葉が当てはまるような場所。それは未完成のまま忘れ捨てられた塔だった。そんな鉄の塔の中、ひたすら上を目指し歪な階段を登る影が二つ。

黒い髪をした二人、長身の男と、その男より頭一つ半ほど小さい少女。

端から見れば兄妹のようにも見える。しかし、二人は別段、特別な間柄ではない、ただこの殺し合いのゲームで手を組んだだけ。

「なあ希思、何でこんなとこ登ってんだ？」

長身の男、水月大和は先に登っている少女、遠坂希思に問うが、希思の答えは数分前から変わることはない。

「文句言わずに付いてくる」

足を止めずに振り返り、そう言う。そんな言葉を言う少女の後を大和は渋々ながら追っていく。

カッソ。カッソ。

と、二人の足音が狭く歪な階段に静かに響いていた。

その階段が途切れるまで登りきった頃には、大和は呼吸を乱し、疲れ果てていた。

それもそのはずであろう、すでに二人はビルの二十階ほどの高さまで登っていたのだ。むしろ不思議なのは希思に関してであろう、彼女も大和と同じ距離を歩き、登ってきた。しかし息を切らすこと

も無く、平然としているのだから。

大和は階段を登っているときに、そのことを聞いた。返ってきた答えは『ようは慣れだよん』、と言ったものだった。

希思はこの場所に何度も来ていたらしい。大和が聞くと、大和を見つけたときもこの場所から見ていたらしい。

希思は屋上へと出るための扉を開け、屋上へと出る。

大和もそれにつき、屋上へと出る。まず視界に入り込んできたのは眩しい陽光、まるで太陽が二人に挨拶でもするかのような。

「眩しい、けど。なんか気分が良いな」

大和はそう言いながら、鉄骨を伝い歩き、屋上の端のほうに移動していく希思を見る。

すでに遠くにいつてしまったことが判ると、大和は少し急ぎながら、希思の下へ駆ける。

その途中、振り向くこともしなかった希思が振り向き、下を指差す。それにつられ、不意に下を見てしまう。

「高っ！」

大和は今さらだが、この高さにあづき、足を竦ませる。そして今度は間違っても下を見ないように、すでに一番端に到着していた希思から少しずつ遠ざかっていく。

笑いながら、大和に高所の恐怖を体感させた張本人が手招きしながら大和に言う。

「何をしてるんだよう、こっちにくるんだよう」

希思の可愛らしい声も、このときの大和には恐ろしく聞こえたようだった。

そして、声に反するかのように、手を眼前で振り、顔を青くしながら言う。

「無理っ！ 高いところは多分苦手じゃないが、これは限度を超えてるぞー！」

まるで逆切れのように言い放つ大和に対し、希思は軽く罵る言葉を振りかけ、大和に背を向けて、綺麗な太陽が存在する空を眺める。ここは”ミズガルズ”という街が一望出来そうなほどの高さだった。この街に高い建築物は少ないのか、見える限りではこの鉄骨の塔以上に高さを取れている場所など無かった。

「見ないの？」

希思はおそらくは親切心で聞いてくるのだが、大和はそれに対しても。

「見ねえ」

親切心を断ち切り、元の階段があつた場所に陣取り、頑なに動こうとしない。

「全く、色んな事を損してるな君は」

「景色なら別にいい、それよりも街を一望できるような場所になんで誰もいないんだ？ 絶対有利だろう？」

「さあ？ でも参加者は遠距離、それにここまでの遠距離を攻撃できるすべを持たないから、こんな場所で見つけても、そこに着くまでに相手が移動しちゃうしね」

複数行動中なら別だけど、と付け加えてミニチュアにしか見えないうであるう”ミズガルズ”を見下ろす。

大和からでも少しだけ見えるその横顔は、何かを思い出したように、どこか寂しそうだった。

そうだ、希思はまだ幼い（年齢が不明なため、見た目だけだが）のだ、こんな殺し合いのゲームにたった一人で残されてしまったのは不安にもなるだろう。と大和はふと思う。そしてそのまま思ったことを口にしてしまう。

「希思」

「んい？ どうしたの？」

「お前つて何歳？ 答えによつては俺はやばい犯罪者になりかねん」
言った瞬間、階段付近にいた大和の顔面に、一番端にいたはずの希思のとび蹴りが炸裂することになった。

扉をぶち抜き、後ろの壁へと直撃する。軽く吐血でもしてしまうのではないか、と不安になるような小さな悲鳴も聞こえたが。

希思は悪びれも、というかむしろ大和に対し激の念をこめて、叫ぶ。

「乙女に対して年齢を聞くとはにやにごとか！ 蹴るよん！」

そう言った希思に対し、ゆっくりと起き上がった大和は正論を述べるのだが。

「もう蹴ってるじゃ……………いてっ！ やめろ、痛いつての！」
何度となく蹴りを入れられた。

「分かればよいのだ、それで大和は何歳なのだ？」

「俺か？ 俺は今十六だが、今年で十七だ」

そんな答えに、予想通りだ。といった顔をして、うなずいているね希思がいた。

大和は少しムツとしながらも、自分が言ったんだからお前も言え、と言うような顔をしていた大和を見ると、仕方なそうに

「驚くんじゃないよん」

「ああ、でも十歳以下なら驚くぞ！」

また希思の一撃が飛び、大和を悶絶させたが、その次の瞬間に、場違いなドラムロールがどこからとも無く聞こえてくる。

少し気になり、その正体を見定めようと、あたりを見渡し始める大和。そんな大和を完全に無視してドラムロールは流れ続け。

「……………実は、……………」

ドラムロールは止まった。不信に思っただけあたりを見渡す大和がいる。

「ドラムロールはあたしなのだ！」

「んな事はどうでもいい！ 年は!？」

「だから乙女の秘密だと言っただけにゃいか！」

怒号と共に、今度は頭に向かつてのチョップが炸裂するが、それに対してはあまり痛みはなかったようだった。

そして結論としては、ドラムロールは希思の声でした。大和も探していたわりには希思であることを気づいていたみたいで、実はどうでもよかつたみたいです。

ちなみに希思の本当の年齢は十………ヘグッ！

知らないほうがいいこともあるそうで………

「ほろ」

唐突に希思の変な声とともに、大和の手へと渡されたのは見覚えのある双眼鏡だった。

「なんだよこれ？」

「双眼鏡っさ」

「いや、それは見れば分かるが。これでどうしろと？」

希思は先ほど見下ろしていた街を指差す。

そして、今度は大和と一緒に街を一望できる場所へと、鉄骨を伝っていく。少しながら、震えていたが、大和も無事に到着していた。そして、いまだに下を見れない大和は一度その方向を確認し、もう一度希思に顔を向け、尋ねる。

「見る、と？」

当然、とばかりに無言で頷く希思。

対照に、んなバカな、と絶句する大和。

「あたしはあっち、大和はこっち。別に一陽、赤い髪の男じゃなくてもほかのプレイヤーでもいいよん。結果としてはみんなと脱出するんだしね」

希思はそういい残すと、階段から出るための飛んで行ってしまったの扉の向こう側へと軽やかにピョンピョン跳ねていった。

大和しかいなくなってしまったその場を静寂が支配する。

「どうしろって言うんだよ！」

全力で叫ぶが、大和のそれは虚しくも風に消されていった。

とりあえず、街を見下ろすことが最優先、ということ、大和は足を震わせながらゆくゆくと腰を下ろしていく。

「ま、まあ、落ちたりはしねえようにいこう」
逝こうと言っていた。

腰を下ろすことには成功したのだが、それから全く視線を下げる事が出来ず、見える最低限の範囲だけを見ようと双眼鏡を覗き込む。

「うん、やっぱり近くは全然見えねえ」

よし、と気合を入れた後、視界は下げられていく。

実にゆっくりと……

大和の眼下に広がる街を視界に入れると同時に、恐怖と異常な疲労で乱れまくっていた息を正すかのように深呼吸をする。そして、今度こそ双眼鏡で探そうと双眼鏡を目にやる。

「ん〜？ よく見えねえ」

一度見てしまえば慣れるのか、しばらくすると、少し顔を緩めて街を見下ろしていた。

しかし、それは一瞬で打ち破られた。

「大和〜！」

「のっつ！？」

大和は希思の自分を呼ぶ声に驚いて、変な声を出す。それはそうだが驚いた瞬間に何も無い空間に身を乗り出していたから。たとえ高さに目が慣れたとしても、落ちたら結局は意味の無いことだ。

大和は体の半分近くが、外に投げ出された体勢のまま動かなくなり、硬直する。

「何してるのっさ、早く早く！」

と、希思の急かす声で硬直が溶けたのか、ゆっくりと、かつ慎重に体を押し戻していく。

さらに急かす声が聞こえるが、大和には完全に耳に入っている様子はない。

元の体勢に戻ると、大きく息を吐き出して立つ。

そして希思が自分を呼んでいることを思い出し、どこにいるか分からないがとりあえず消えたほうへとゆっくりと鉄骨を伝っていく。
「これは九死に一生だ………」

「全く何してるんだよ〜」

そうだったのは、希思だ。自分の能力と言った狙撃銃スナイパーライフル「ヘカート
IE」のスコープで街を覗いている。

その様は大和が今までに見た希思とはかけ離れていた。お惚けな言動こそは変わらないが、その雰囲気などは別人のようだった。

能力であるスナイパーライフルのスコープを覗き込む様はまさに戦闘に馴れ親しんだ狙撃手だった。

「まあ、気にするな。それでなんだ？ 見つかったのか？」

「？ まあいいや。そう見つけたの」

希思の位置から少し離れながら、大和は手渡された双眼鏡で希思の指が指し示す場所を見る。

見えたのは大和や希思と同じ、黒髪の男。

「あの黒い髪か？」

「そうだねん、この場所から一番近くにいたのがあれだよん」

「行くのか？」

「行くよん、んじゃ大和、復習だよ。あたしたちの目的は？」

「話し合い、それが無理だとしたら、指輪の破壊。だろ。ちなみに現状判断は一瞬で行うこと」

「よろしい、でも、心配なことだし、あたしが行くからね」

そう言って希思はスコープから目を離し、立ち上がる。

「希思、俺はどうするんだ？」

「携帯は持つてるっしょ、番号教えるんだよん。それで連絡取るから」

「いやでも、電池とかねえし」

「大丈夫なのだ、この街では案内人と連絡を取るための手段なのか、電池はなくならないっばいのだ」

便利だなく、と言って携帯を開き。もう一番端、というものにトラウマでも出来たのか、近づく事はせずに希思に投げる。

「勝手にしてくれ」

「にやー、と言いながら大和の携帯を見て、なにやらいろいろ弄くっている。」

少したつと、携帯を投げ返され、ねこ子が走っていく。

「んじゃ、目標の居場所を電話で知らせてねん」

いつの間にか、元に戻っていた扉の閉まる音とともに、大和は双眼鏡を覗き込み、黒い髪の男を目で追いかける。

希思は歪で未完成な階段を自分が出せる最高の速さで下りる、失敗してはいけない、自分が見た人間も、知らない人間も誰も死んで欲しくない。それは不可能だ、判ってはいるがあきらめれない。だから、全力で走る。

鉄の階段に響く、うるさい音。

否応でも耳に入ってしまう、不快な音を振り切りながら、さらに下りる。

「はぁ、疲れる〜」

不意に脱力した声ようなを出す、希思のスピードは収まらない。
「後、三階だけだね」

ドンツ、という、乱暴に扉を開く、というより蹴り壊す音と共に、
希思は自分のスカートのポケットの中から携帯を取り出す。

少し操作し、先ほど登録したばかりの番号が画面に出た。そして
携帯を耳に当てて、応答を待つ。

そして、直ぐに声が聞こえる、先ほどまで一緒にいた男の、大和
の声。

『希思、まだあんまり移動してないぞ』

「この場所からどっち？」

『この場所がわからねえが、とりあえず見える大通りをしばらく真
つ直ぐだ』

「了解よん！」

了解。その言葉と同時に走り出す。

大和の言ったとおり、大通りを走る。いかにも賑わいを出し
そつな商店街だったが、人は希思以外どこにもいない。

ここは大和が来て、一〇八人。それ以外本当に無人の街なのだ
実感する。いや、今はもつと……………

『聞こえるか？』

「大丈夫よん」

『今、こつちからお前が見えた。その場から真つ直ぐ行って、四つ
目、いや五つ目の右の路地だ』

「五つ目、OK！」

携帯を耳に当てたまま、希思は走り出す、周囲を確認しながら、
路地の数を数えている。

「一、二」

二つ目の道を超え、まだ大和の声は聞こえない。

「三、四」

止まる、そして右を見ると、大和の声がなく、目を見開いて来た道の路地を数えなおす。

それを行い不思議に思った。五つ目の路地など存在しない。上から見えるのにこつちからは見えない。やはり、この場所は異常なことで起きるのだろうか。

希思がそう考えていた瞬間だった、大和の声がまた聞こえたのは……
『わりい、数え間違いだ。四つ目だった』

聞こえた瞬間、笑いながら、塔に向かって手で首元を切るようなサインを見せ、路地に入る。電話越しでも大和が慌てているのがよく分かった。

その路地は、おそらく、女でも男でもギリギリであった狭さの路地だったが、ねこ子ほどだと、簡単に通れる。

しかし、さすがに携帯を持ったままだと邪魔になるためか、大和に一言言い。携帯を閉じて狭い道を歩く。

それほどの長さも無かったため、直ぐに路地を抜けることは出来た。

希思が出る瞬間すら上からは見えていたのか、携帯が勢いよく鳴る。

『聞こえるよな、その場から北に向かって、道なりに進んでくれ……
……それでさつきはな、あれだ、あの、あれだよ』

「ホイさ」

希思は大和の最後のほうの言葉は完全に無視して、言われたとおりに走り出す。今、この大和の言葉が、目的を達するための唯一の手がかりだから。

「大和、後どのくらいっさ？」

『道なりに行ったら、曲がるだろ。それから二つ目の左の路地を抜けたとこだ』

「直ぐだね、大規模に移動したら言ってよ。手に持ってるの疲れた

から、切るよん」

『判った』

そう言ったのを聞くと、電話が切れた。

希思は一度立ち止まると、長距離の移動で乱れた息を正しながら、指輪の存在を確認するために、胸のポケットに手を当てる。

目を瞑る、息を大きく吸い込み、ゆっくり吐き出す。

思考を完全に除去し、精神集中を行う。

「 よっし」

希思は自分で頬を叩き、気合を入れるかのように声を出す。

そして、目が変わる。今の希思にはもう油断など存在しない。もう一度深呼吸すると、大和が言ったとおりの道を走る。

「一、二。ここさね」

今度は狭くもない路地だった。人が簡単に通れる道。だが、入らなくても長いということが判る。この先に、殺し合いのゲームの参加者がいるのだと認識しながら、ゆっくり歩き、路地へと入っていく。

狭い路地の中、おそらくであるが半分くらいまで行くと、希思は意を決したかのように走り出す。それと同時に一瞬遅れか、携帯が激しい音で鳴り響く。

走りながら携帯を開き、通話ボタンを押す。

「どうしたの？」

『まだ大丈夫だな、希思出るなよっ！ 路地から出るな！』

「ほへ？」

言うのが遅かったか、希思はすでに路地を飛び出し、広く開けた大路地に出ていた。

その瞬間、聞こえたのは電話越しの大和の声でない、男の声。

「子供か、しかし致し方ない。これは生死を賭けた殺し合い、情けない」

希思が声の主を確認するために振り向くと、その場には上段に剣

を構える男の姿。それを見ると同時に、男の剣は振り下ろされる。
『希思っ！』

電話のふちから、激しくすりあつような金属音が響く。

「危ないよん」

二カツと笑いながら、剣を眼前で止めていた。自分の能力で。作り出した狙撃銃で。

銃が刀を防ぎ、それを必死の形相で両手で支える希思。

「よく受けたな、だが………」

「逃げるが勝ちよん」

いうより速く、希思はその場をダッシュで駆け抜ける。

男の声が聞こえるのだが、完全に無視を決め込んで、走る。自分に接近戦は向かない、そんなことを分かっているからこそ、一瞬の判断。

『銃士』を指輪に戻すと、さらに速度を上げる。ただの重いものなど、今はいらぬ。遠距離でしか役に立つことのない自分の銃は必要ない。

「距離をとらなきゃにゃ」

後ろを振り向きながら逃げる、後ろには男が追ってくる。多少男のほうが早いためか、だんだん差を詰められていく。

「何とかなる、かにゃ〜？」

鉄骨の塔の上で大和は見えていた。

希思が男の一撃を受け止め、その直後に迷いなく男から逃げる瞬間を。しかし、距離を詰められていくのも見えている。

「さつさといかねえとな」

扉に向かって走り出そうとするが……

（さて、間に合うのか？ 少なくとも、階段を下りてあそこまで行くには四十分近くかかる、その間、希思は逃げるにしても、戦うにしても間に合うか？）

立ち止まる、そしてもう一度、希思のいた場所を見る。

「そもそも覚えてるのか、俺は？」

自分が道を覚えているという確証もない。自慢じゃないが、大和は記憶力など凡人並みだ。

その大和が、単純な道だが、それでも覚えているという確証はない。

再び考えようとするが、首を振る。

大和にとって考えるとは、この場に、この状況にとって意味のない行動だ。

「いけるよな、考えんな。大丈夫だ」

そういうと、何もない空間に向かい走り出す。

鉄骨の抜きん出た一本を伝い、最後まで走りきると同時に、真っ青な空へと飛ぶ。

「うらあああっ！！」

空に身を投げる。

大和の目は遠くを見ている。それは男と希思が対峙するはずの場所。

そして、その場に行くために飛び出した。そして同時に叫ぶ、自分が生き、希思のもとへと行くための唯一の方法を、このゲームにおいて大和にある唯一の力を……

「さっさと来い！ 『磁砲』 ！」

第八話：唸る乾いた銃声

戦いには自分の理想とする距離があるという、希思にとって少なくともそれは近距離ではなかった。だから距離をとるために入り組む路地を逃げる。しかし距離をもてても視界がふさがれる様な場所では意味がない。

そして男の理想とする距離というのはおそらく、希思とは正反対だ。手に持つのは一振りの刀、それは希思を追う男の手の中で静かに時を待つ。

希思を切り刻む時を……………

「突然斬りかかってくるのは予想外だねん」

狭い路地だが、横に入る道がある度に曲がる。少しでも見つけにくく、そして距離を持つために。

男はそんな希思に対しても、まるでどこにいるかを知っているかのように正確に追ってくる。確かに希思はいつも横道に入る、だが幾つにも分かれた分岐点から正確に希思を追跡することが可能なのだろうか。

一つ、希思は予想をたてていた、それは

「あたしと同じ能力なら気配とかかな？」

希思と同じ、それは指輪による実武器の生成能力、希思なら銃、そして希思の考えで、だが男なら刀、といったようなものだ。

そしてその生成能力には特殊な技能も存在していた。それは生成した武器、もしくは道具の知識を得る。

使用方法、その特殊な力、武器の特長を生かすための情報、それらの知識を簡単に手に入れる。

それゆえ、元来、狙撃など縁の無かったはずの希思が銃の反動の殺し方や、自分が一番狙撃に有効な距離の理解、それが出来たのだ。

「そろそろ隠れようかな？」

「不可能だ、逃がしはしない」

男の言葉は希思のすぐ近くで聞こえた。

その声を聞く、男を見る限りなら大和と同じ位の歳に見えたが、発せられた声は想像より遙かに低かった。

希思は勢いよくその場を飛び退く、瞬間に男の刀は希思のいた場所を空を切っていた。攻撃を予測した訳ではない、ただ一瞬、危険だと思っただけ。

それは人の本能のようなもの。

「危ないじゃないか〜！」

「全て敵だ、殲滅するのみ」

どこか機械的にも思える声とともに、刀はまた振り切られる。

刃が風を斬る、いやに鈍い音。

「まだ、だね……………まだ今じゃない」

まだ視界で認識できる刃を避けるとともに、入り組む路地を走り出す。

希思は判っている、この場で自棄になり戦おうと、たったの一分の勝機さえない。だから、判っているからこそ逃げる。

そして、飄々とした声で男に言う。

「しつこいと嫌われるよ〜」

「消える存在に嫌われようとは関係ない！」

希思の言葉を切る男の言葉と同時に、刃は狭い路地をこじ開けるかのように壁を切り裂く。

「逃げれるかな？ というか距離をとるにはどうしよ」

一瞬、隙の出来た男に向かい蹴りを出す、足払い。男は軽くかわそうとするが小さく飛んだ瞬間、希思の持った銃がまるで突くかのように出される。

それを刀で防ぐ、しかし希思の攻撃はとまらない。

一瞬で銃を引き、腹へと蹴りを加える。

男が一步下がり、たじろぐ瞬間を見ると、振り返りまた一つの角

を曲がる。

「ありゃ？」

曲がった瞬間、視界に入ったのは横道一つない一本の路地だった。男はまだきていない。まだ少し遅れている。

この場で希思に迷う暇などない。

直ぐに結論を出し、行動に移る。

「によ！ こりゃ、しょ」

変な声を発しながら、希思は銃を構える。そして少しでも時間が惜しい。

男が来る前に行かなければ必死に攻撃に移った意味がない。すぐさまあたりを見渡し、一箇所を見据える。それは少し離れた壁だ。その少し離れた場所に向かって、スコープを見ることなく弾丸を放つ。

狭い路地の中を反響する音は、耳を突く激しい爆音。

そんな爆音と共に、裸眼だけで狙っていた壁は吹き飛ぶ。

内側へと壁であった破片を撒き散らしている。

「よっし、行くよん」

そう言って走り出すが、後ろに男が見えた。

しかし、それを見る必要は無い。だから迷うことなく希思は、破壊した壁の中へと入っていく。

「逃がすことなど無い」

どこか機械のような声を響かせながら男は希思の後を追う。

少し距離があるが、男が有利ということに変わりはない。しかし、少し不安を抱いていた。

こんな不利な状況においても、顔には笑みを浮かべる少女に対しての不安を……

希思にとって、遮蔽物のある場所は距離があらうと無かるうと得

意だ。自分が嫌いであるこの身長が功をそうしている。

少しでも大きな遮蔽物に隠れ、見えぬ場所からの狙撃。それが希思の近距離での唯一の戦い方。

そして案の定というべきか、この建物の中は廃墟のようであった。所々崩れた天井のおかげで、その隙間からまぶしい陽光が部屋を照らす。

希思は、ニカツと笑う。そして一瞬だけ振り向き男の存在を確認する。

まだ、来ていない。

希思は走り出した。この場は希思にとって非常に好都合な場所だ。

崩れた瓦礫の破片や、希思が撃ち抜いた壁の破片によって荒れた部屋の中、男は希思を捜す。油断は無い男、ちよつやさきひと長夜裂人は刀を手放さない。

裂人は考えていた。笑みを浮かべた少女の武器は判っている、そして自分の武器は知られていない。だから、こちらが有利であることに変わりはない、と。

裂人の能力は刀の生成では無かった。その証拠といわんばかりに刀を握る手には銀の指輪が神々しく光っている。

「……………隠れた、か」

遮蔽物なども一通り見渡し、希思がいらないことを確認する。それと同時に、ゆつくりと構えを解く。両手を下げ、訝しそうに辺りを見ている。

「いない、のか？ ……いや、確かに」

一瞬目を閉じる。

何かに気づき、その瞬間、身を翻す。

聞こえたのは、どこかで聞いた爆音だった。耳を突くような銃声だ。

乾いた銃声。それはたった一秒前まで自分の右手があった空間を通過した音であった、と避けたあとで気づいた。

裂人はその攻撃で理解した、希思のいるであろう場所を。

「一撃で仕留めぬ狙撃手など、……………役に立たんぞ！」

一度回避し、地面に撃ち込まれた弾丸から、発射地点を見極めると裂人は跳ぶ。

場所は理解した。後はその距離だけだった。

しかし、

ドンツッ！

再び聞こえた、乾いた銃声。

「……………な、につっ！……………」

裂人は目を見開き、自分のわき腹を銃弾が掠めたことを確認する。希思の銃弾は掠めただけ、そうなのだが、銃の威力が異常であったのか、鈍い激痛が全身へと走る。

わき腹に当てた手は赤に染まった。まだ致命傷ではない、しかし外したのか、外れたのかが分からない。

そしてそんな事より裂人にとって一番不可解であったのは、弾丸の軌道だった。

裂人は確かに一度撃ち込まれた方向へと来たはずだった。

正面からの攻撃なら、かわせる自信も叩き切る自信もあった。

しかし弾丸が跳んで来たのは、予想も無いはずの背後だった。後ろを振り向いた瞬間か、乾いた銃声はまた響く。

「見極める」

一つ、高速で飛ぶ弾丸を回避する。全神経を集中させ、銃声によって消される弾丸が空気を切る音を聞く。

元々、ある一つの剣術の師範代として存在していた裂人だ、銃弾を切ることは難しいが、不可能ではなかった。

「はっ！」

弾丸の射出される、乾いた銃声、それと同時に裂人は言葉と共に弾丸を斬る。

半分の鉄くずと化した弾丸は、小さな音を立て、地面に落ちる。弾丸の軌道は正面だった。そこに間違いは無い。

しかし、先ほどのような失態は犯せない。もう少し、見極めるために、裂人は眼に頼らないため目を閉じ、神経を研ぎ澄ます。

遮蔽物が散らばる狭い部屋の中を支配しているのは静寂だった。聞こえる音は裂人の一定感覚で聞こえる呼吸音だけ。

(神経を集中、自分の周囲の環境を理解。弾丸の軌道を捕捉、………
…そうだ、もう一度くれば、殺れる！)

そう思った瞬間だった、再度乾いた銃声が響く。今度は異常な数の爆音と共に……

裂人は瞬間に確認するが、また理解できなくなる。

裂人はなぜこうなるのかが理解できなかった、弾丸がまるで生き物のように自分を取り囲んだことに……

「……………ちい！ 『増閃』」

指輪、自分の能力の名を呼ぶと同時に、水平に刃を振るう。両手で光る刀を水平に保ったまま、回転する。

裂人の能力、それにはもう狙いをつける意味が無い。

「一つが……………三十二ツ！！」

言葉と共に、周囲を囲むように跳んだ弾丸は斬られ、小さく音を立てて地面に落ちる。それと同時に、見つける。自分を狙う少女を、まるで獲物を狙うような狩人である少女を……

希思は能力で生成した愛銃、『ヘカートイー』を構え、スコープを覗いていた。位置は簡単だ、遮蔽物の広がる一階から階段を登りきった場所、そこから一番近くに存在している下を覗き込むが可能な壊れた部屋。

しかし、希思は裂人が動こうと、この場から動いてなどいない。ねこ子の能力は『ヘカートイー』の生成だけではない。

それについての知識、そして、もう一つだ。

「ポイントBから撃ち抜くよん」

裂人が近づくことなど気にしない様子でスコープに片目を除かせ、もう一方の目は確かに男を見据える。

しかし、銃口が狙うのは目標であるはずの裂人ではない、銃口の先に見えるのは小さな鏡のようなもの。

希思はそこに、弾丸を放つ。躊躇い無く一気にトリガーを引く。同時に自分の小さな体で反動を受け流すかのように殺す。

聞きなれた爆音が鏡に向かい飛び、当たると同時に鏡に吸い込まれていく。

「次は………いったん、逃げよ」

吸い込まれた弾丸は裂人を背後に存在していたもう一つの鏡から背後を襲った。しかし、刀をたった一振りするだけで銃弾を斬る。

そのまま、逃げようとする希思を睨み、その場に跳ぶ。

二階へと一気に跳躍する。それはまるで人間の跳躍力ではないかのようなジャンプ力。

「えっ！？ やばいよん」

「断罪だ！」

刀は振り下ろされる。先ほどと同じく、銃を掲げ、希思は我武者羅に自分の身を守ろうとする。

耳を突くいやな音が響き、後に裂人の声が続く。

「笑止！ その程度ではもう止められん！」

言葉通り、銃は徐々に切られていく。それは一箇所ではない、銃のボディに数箇所切り傷が生まれる。

銃が斬られようと問題は無いが、銃を斬って刀の斬撃というの攻撃が止まるとも思えなかった。

「やっば〜」

キイイイツッ！

銃が刀を止めるより嫌な金属の擦れ合う音が二人の耳に響く。

いや、三人の耳に響く。

「ふい〜、間に合って、るよ、な？」

希思の顔の直ぐ間近に大和の呑気そうに笑う顔があった。

笑う顔は一変、苦痛の表情に変わった。原因は希思だ。

「遅いのだ！ すぐに来るのだよん。といったじゃにゃいか」

希思はいきなり現われ、自分を助けてくれたはずの大和の急所をいわれる部分へと蹴りを入れた。

「……………ツッ！！……………」

一瞬、裂人の行動は止まった。

今の状況を理解できていない、突然どこからともなく青年が現われた。そして自分の切ろうとしたものを簡単に寸前で止め、少女と言い争っている。

そして刀を見ると、いつの間にか黒い鉄のようなもので、綺麗だった刀身が隠れていた。

しかし裂人の考えは簡単だ。この場において自分にとっては全て敵。誰であろうと殺すだけ。そう思い再び黒ずんだままの刀を振りかぶる。

「大和っ！」

言い争っている最中での、希思の声。

危ない、そう続けようとするが大和と裂人の声で聞こえなくなる。

「んあ？ 何だ？」

「まとめて死ぬが良い！」

裂人は全力で刀を振り切ったはずだった。

しかし、刀が二人を切ることは、刀が二人に触れることは無かった。

「一度聞いた言葉を借りるとだな、……………残念無念、また来週。だぜこの野郎！」

刀は裂人の手を離れ、黒い壁に刺さっていた。否、普通の壁ではない、それは大和の能力出生成された砂鉄の壁。

「希思っ！ 距離、取れ！」

「あんがとねん！」

敬礼するかのような仕草の後、希思は部屋を飛び出る。

カンカン、と階段を下りる音が聞こえる。

裂人の行動は速かった。裂人には大和の能力は分からない、これは今はまだ大和にとっても言えること。それなら、有無言わせぬ力で押し込めれば良いだけだ。黒い壁に刺さったままの刀を力ずくで引き抜く。

大和はゆっくり立ち上がり、裂人に向き直る。

「さて、戦いたくない。つてもいつてらんねえし、仕切りなおしだ」
「誰であろうと殺すのみ」

「それなんだが、話し合いっての　　!?!」
いい終わるより早く、裂人は斬りかかる。まるで話し合いなど不可能でしかない。そう言うかのように……

しかし刀は届かない、寸前で止めてもいないはずなのに、自分の思考とは逆に勝手に止まってしまう。

自分の手が自分のものではないかのような、そんな操られているような感覚が裂人の脳裏を襲う。

「……貴様ツ！ 何をした」

激昂する裂人の問いに大和は飄々として答える。

「右手、見てみるよ」

訝しげに自分の右腕を見ると、黒い。先ほどの刀の刺さった壁と同じ色だった。

人間の手がここまで黒くなることはない。では何故？ そう考えていると、答え直ぐに返ってくる。

「それは砂鉄で、俺の能力は磁力だ」

大和は何も迷うことなく、自分の能力をさらけ出した。

そして、裂人に対し言い続ける。

「だから、今のお前は俺の操り人形だ、四肢に砂鉄をくっ付けたからな。という訳で、話し合いをしないか？」

「不可能なり」

「そう言うなって、共闘しないか？」

「それこそ不可能だな、この戦いは全員を殺すまで続くのだから」

「……………んじゃ、最後だ。……………脱出しねえ？」

そう言うって、そのまま首をかしげ、動かぬ裂人に聞く。

「お前って、何か夢があるのか？」

このゲームに参加するのならば誰しも何かの目的を持つ、それを聞こうとしている。

もしそれが、希思のものや、自分のものであるのならば、まだ何

か手はあるかもしれない。そう思つての判断だつた。

そして、間髪いれずにその問いに対する答えが返ってくる。

「当然だ、貴様には到底理解できないようなものだ！」

「……………そつか。それじゃあ無理だな。……………じゃあ、指輪を…

……………破壊する！」

言葉と共に、にこやかな顔であつた大和の表情が一変する。

手を伸ばし、甲を地面に向けたまま五指を開く。

「刀がお前の能力か？」

「さあ？」

裂人の返事と同時に、五指を包むように手を握る。

それと同時に砂鉄は刀を完全に飲み込んだ。

金属が悲鳴をあげ砕ける。砂鉄の中から落ちるのは、もともとの形を成さない鉄の物体。

同時に裂人は砂鉄の拘束が緩んだのを見計らつて跳ぶ。

「あつ！ ミスつた」

着地と同時に懐から短い刀を取り出す。

「何持つてんだよ！ 銃刀法違反だぞ！」

刃長約50cmといったところか、錆など一つない綺麗な刀身を持った小太刀。

裂人は大和の言葉は無視し、一気に突撃する。

刃を突き出したまま、大和の首筋を狙う。

「こつちだ！」

声で、砂鉄を動かし、盾を創り出す。

「視界を遮るとは無能が！」

言葉は大和の右隣より聞こえる。盾の生成で見えなくなった正面から移動したのだろう。

そして今度は突きではなく、全力での振り下ろし。

瞬間に、裂人の声は大和には理解できない意味を持った言葉が届く。

「一つが、二つ」

小太刀はその声と同時に振り下ろされた。

「二つが、四つ」

大和は一瞬の判断で砂鉄を手に纏わせ、右腕を掲げる。黒の手甲で攻撃をやり過ぎそうとする。

「四つが、八つ。八つが、十六」

黒の砂鉄は反発の磁場を帯び、小太刀を返そうとする。

その瞬間に、刀は言葉と同時に振り切られる。

「十六が……三十二ツッ!!!」

刃はその瞬間に大和の腕へと直撃する。

しかし、思っていたとおり砂鉄の手甲に守られた右腕は無事だ。

しかし……

「……んだよ、これ」

腕は斬られていた。砂鉄で纏う右手ではない。だらん、と下げたままの左腕が。

今はまだカッターで少し斬られたような小さな傷だったが、確かに刃が届くことのなかった左手が斬られた。

「我が能力だ。貴様の能力を聞いたことだ、情けで教えてやろう」

「ツへ、ム力つく言い方」

悪態づく大和の言葉を聞かないまま、裂人は言った。

「『増閃』斬撃の数を倍加し、偽りの斬撃を通す能力だ」

そう言うのと、小太刀を水平に振るう。

「一つが、……十六ツ!!!」

(数の倍加? なるほどな!)

水平に薙かれる刃は砂鉄の壁に嫌われる。

小太刀が壁に触れた瞬間、反発を起こし、返される。

「笑止! 刃は返せても、斬撃は反発させることなど出来ないだろう! そしてこんな薄い壁など……」

言った瞬間、壁が崩壊する。

「……ッ！」

届いたのは一つの刃、腕を軽く斬る程度の痛みだが、このまま続ければ完全に砂鉄を破られるだろう。そう理解し、距離をとるために後ろへと下がる。

裂人は何故か、下がった大和を無視し、背後を向き刃を振るう。

地面に落ちたのは真つ二つに切られた銃弾だったもの。

(うへえ、何でそんなもの斬れんだよ)

考えると同時に、携帯が鳴る。

男が振り向く前に携帯を取り出すと、ディスプレイには希思の番号が表示されている。

「今のつて？」

『指輪を空中にほつてくれると打ち抜けるからよろしく！』

ガチャ、と有無言わずに切られる。

「はあ？ 手伝いは？」

「死ね！」

大和が無駄なことをしている間に、裂人は距離を完全に埋めていた。

「のっつ！」

水平に振り切られた小太刀を、立ち姿からブリッジをするかのようには器用に避ける。

途中でいやな音が聞こえた気がするが、気のせいということにしておこう。

ブリッジの勢いが止まらずに、背中から地面へと激突する。

「いてて」

「貰ったぞ」

裂人は地面に転がる大和の腹を踏み、小太刀の刃を向ける。

大和の目の前に少し光る刃が運ばれた。

そんな危機的状況の中、大和は………笑った。

裂人は気づかないようで、大和より、どこから飛んでくるか分か

らないもう一人の、希思の攻撃を気にしている。

(狙撃はもう、最後の一回だけだぜ、っと)

大和は裂人の気が削がれているうちに、能力の本体を探す。
腕、足、手、顔、髪、そして小太刀。全てを見、確信する。

(手袋?……その手で持った物の数を増やす、ってわけだな。分かれば簡単だ)

「『磁砲』! 出ろっ!」

そういつた瞬間に、砂鉄は裂人の足を引き、転ばせる。そしてそのまま、大和自身の手を持ち上げ、大和を包む。

転ばせたはずだったが、器用にも直ぐに跳び、完全に転ぶことは無かった。

「まだやるか!」

「まだまだ、やるねえ、って言ってもお前が終わるがな」

砂鉄は宙を自在に舞い、かわそうとする裂人の右手、つまりグロ―ブへと踊りかかる。

「そろそろ貴様は邪魔だ」

裂人は大和にそういいながら、無駄の無い行動で避ける。だが避けきれない。

砂鉄の量は言ってしまうえばこの場すらも飲み込むことが出来るのかもしれない。そんな量だ。

だから、避けきるのは不可能に近い。

「ちい!」

バックステップを取りながら、小太刀を払う。

「失敗だぜ、その考え」

「黙れえ!」

斬撃は倍化した、砂鉄を襲うが、先ほどとは違う。限りがないほどの量だ、全てを斬れるわけがなかった。

そして小太刀に砂鉄がまとわり付く。

まとわり付いた瞬間、小太刀は形を無くし、ただの鉄くずと化す。

小太刀の柄に纏わりつく砂鉄はそのまま、右手に侵食する。

「俺の」

手を開きもう一度、力強く握る。

「勝ちだ！」

砂鉄は右手を圧迫する。骨すらも簡単に折ってしまうほどの圧力を加える。しかし、大和の意思でか裂人の右手の骨が砕けることはなかった。

砂鉄は裂人の右手から落ちる。見えたのは素のままである手。グローブは破壊されていた。

それと同時に大和は走り、裂人へと向かう。

「くそ！ 邪魔だっ！！俺は夢を」

半狂乱の裂人の言葉を無視し、大和はこぶしを振りかぶる。

「黙って……………寝てろっ！！」

渾身の一撃はかわすことを忘れ、狂った裂人の顔面を殴打する。

斜め上からの衝撃で裂人は地面に叩きつけられ、そのままひれ伏す。

倒れた裂人の右手の指に指輪が戻っていることを見、大和はゆつくりとそれを取り外す。

「これで、死なずにゲームオーバーだ」

言葉と同時に、握った銀の指輪を空中へと放り投げる。

それは綺麗に真上に飛び、弧を描いて戻ってくる瞬間。

ドゴンッ！

と、雷鳴にも似た咆哮が耳を振るわせる。

「マジで当てたよ……………」

目の前に落ちてきたのは粉々になった、指輪だったもの。撃ったであろう方向を向いて。

手を出す。

そして、親指だけを天に突き上げて笑う。
「ミッシェンコンプリート。ってか？」

第九話：電話の主

希思がいるであろう方向を向いていた大和だが、突然として力が抜けたかのように地面に落ちる。ゆっくりと大きく息を吐く。

ほんの数日前まで普通の日常を歩んできた大和だ、たとえ非日常を望んでいたのだとしても、こんな非日常の中、殺し合いという戦いを始めて体験したのだ。

大和は殺す気など全くないが、相手にはあつた。そんな鬼気迫る状況で自分を見失わず、今の現状を把握する。

（生き、てるな。ははっ、……………怖ええな。本当に殺し合い、そんな戦いか）

地面に背中を預け、大の字になって寝転ぶ。小さな瓦礫などが背中を突くが気にはならない程度のものだ。

寝転んだまま、手を顔の前まで持つてくると、再び大きくため息をつくと同時に、手を握る。まるで自分がここに存在することを確認するかのよう……………

少し体を起こし、近くで倒れている名を知らぬ男を見る。素人の大和の一撃で気絶でもしているのか全く動く気配はない。

ゆっくりと立ち上がるうとしたとき、ポケットの中で携帯が鳴る。

「希思か？」

そう思つて、携帯のディスプレイに映る文字を見る。

そこには……………想像とは違う、意外すぎる名が表示されていた。

『いするぎみつ
石動禪』

携帯のディスプレイにはそう書かれていた。大和が元いた世界での友人の名前。

大和は一瞬の安堵と共に、何かに対する不安を覚えた。

大和はこの場所に来て何度か、元の場所にいるはずの友人に電話をしてみたのだ。

しかし、繋がることは無かった。この世界では電話は無理なのか、そう考えていたが、それは希思によって崩された。

確かに、この世界にいる人間には連絡をとることは出来る。そう言っていた。

つまり、この世界でいる大和の携帯に元の世界での友人の名前が出た、その理由は一つだった。

「あいつも、このゲームに？」

そう言いながら、携帯を開く。もう一度、名前を確認すると電話に出た。

「禪、お前もここにいいのか!？」

「お前も、つてことはいるんだな、この街に」

聞きなれたはずの友人の声、そのはずなのだが、その声のどこかに大和は、何かが違っているような違和感を感じた。

「いつ来たんだよ」

「少し前だ、このゲームは」

「意味がわかんねえだろ!？ 何で殺し合いなんて……」

大和は電話越しの友人の声をさえぎって、共感を求める。

当然、大和は友人の答えは自分のそれと同じだと思っていた。

しかし返ってきた答えは……

「……何を言ってる？ なんでも望みが叶えられるんだろ？ 他人

なんてどうでもいいじゃないか、願いが叶うんぞ。最高じゃないか」

大和はその答えに、寒気を感じた。つまり、ゲームを前面に参加し、プレイヤーを殺す。友人であるはずの禪はそう言っているのだ。

大和の知っている石動禪という人間はこんなに歪んではいなかった、何にでも悪というなら反発し、抵抗する。そんな正義感の塊といった感じの人間だった。

その石動禪が殺し合いのゲームを肯定した。

「禪？ なに言ってるんだ？ 殺し合いに……賛成するのか？」

『当たり前だろ、だからこうして、いろんなやつに電話をかけているんだよ。新しい人間から殺すためにな、少しばかり躊躇ってくれるから楽だよな』

壊れている、大和はそう感じた。なぜ好き好んで自分の知り合いから殺そうとするのか、理解できない。

そして、禪は言った。『躊躇うから楽』、と。

「誰か、……やったのか？」

大和はその問いを聞くのが怖かった。しかしそれは聞かなければならない気がした。

『……ああ、久津未来くつみらいって覚えてるか？ 覚えてるよな、あいつもここに来てたな。まあ、もういないがな』

久津未来、大和と同じクラスだった少女だ。あまり話したことは無かったが、消極的なようであつたのは覚えている。彼女が、もういない。

その答えで考え付く答えは一つしかない。

「 殺したのかつつ！！ 」

『ああ、簡単だったさ、迷ってたしな。このゲームが怖いとか何とも言ってたな』

このゲームが恐ろしいのは大和だって同じだ。しかし、大和に恐怖を与えたのは石動禪という友人の言葉に、だった。

電話越しに、禪の笑い声が響く。

『いつもみたいになちつせえ声じゃなくて、甲高い悲鳴だったな。気持ちいいくらいだな』

平然と言つてのける禪。そこで、大和はシエラの言っていたことが本当であるのだと理解した。

『このゲームのは壊れている。プレイヤーもだ。一度覚えた快樂はなかなか捨てられない生き物』、まさにそうだろう、禪は壊れていた。

そして、一人かどうかは知らないが、久津を殺した瞬間から、おそらく異常なまでに飢え始めたのだろ。だからもつと、死を求めてしまう。

大和は携帯が壊れてしまうかのようなほど強く、強く握った。そして喉の奥から捻り出した様なかすれた声で言う。

「……………禪。お前は間違ってる。この殺し合いなんてものを肯定してしまっなんて」

『ははっ！ 大和、お前のほうが間違ってるぜ、郷に入っては郷に従え、って言うだろ？ それだよ、殺し合いのゲームに参加したんだ、やるしかねえだろ』

「それが間違ってる！！ 何で、迷いもなく人を殺すんだよ！」

『ゲームだからな。お前、この世界で死ぬとどうなるかなんて、俺たちで分かるのか？ わかんねえだろ？ だから本当に死ぬかどうかだって怪しいじゃねえか』

「それが本当だったら！」
『残念だったな、って言うてやるよ』

笑い声のはじめ、電話越しに大きな声が響く。

そして、その言葉は大和を本気にさせるには十分だった。

あくまでも、この殺し合いを肯定する禪。

あくまでも、この殺し合いを否定する大和。

「禪」

『んだよ？ 気が向いたから、ダチのよしみでしばらく生かしておいてやるよ。まあやるなら相手をするがな』

「人道を踏み外したお前は、俺が止めてやる」

そんな大和の言葉に、禪は嘲笑で返す。

『くは、ははっ。馬鹿じゃね？ 止める？ 殺すの間違いだろ。お前も殺したいだけじゃねえか』

「違っつ！ お前を止めてやる！」

『まあいい、やってやるよ。でっけえ塔の見える大通りだ。さっさ

と来いよ』

「今、行ってやるさ」

そういうと電話は切れる。向こうから切ったようだ。

大和は立ち上がり、携帯をしまう。

そのまま歩き出そうとすると、一つの人影が、こっちに走ってくるのが見えた。

「にゃ〜。大和〜、無事で何より〜」

希思の雰囲気ぶっ壊しの抜けた声が耳に入る。

声を聞き、希思のほうを見て、顔に笑みを浮かべる。少し歪かもしれなかったが、感情を偽るのが得意な大和だ。大丈夫であろう、と思い込むことにした。

「希思、早速だがこいつはどうするんだ？」

「運ぶのっさ、目を覚まさないしね」

「目を覚まさない？」

「そうだよん、指輪を破壊されたプレイヤーは意識不明に陥るの」

大和の顔に指を近づけて、希思は言った。

その中の一つの単語に、大和の意識は持っていかれていた。

「意識不明？」

まるで、そんなことは聞いていない。とでも言うかのように鸚鵡返す。

顔には驚愕の表情も浮かんでいないが、希思は気にした様子も無く、答えた。

「そう、一種の植物状態だよ」

「なツツ!? じゃあ何でこいつを」

「何でって、前にも言ったじゃにゃいか」

「そうじゃない、何で植物状態に、殺さねえ意味無いじゃねえか!」

突然知った事実にも、驚きを隠せずに声を張り上げる大和に対し、達観したような希思は冷静に答える。

「そうでもないよ。大和は死んでしまうと、植物状態、確かに治せないかもしれないけど、そんな状態でも生きて帰るとどっちがいい？」

死ぬか、生きるか。

そう問われた瞬間、どちらを選ぶか。

考えてもわからない。ただ、生きて帰ればまだ、もう一度でも歩き出せるかもしれない。そんな考えが大和の頭の中を巡る。

普通なら生きて帰る。そういっただろうが、意識が戻らないなら死んでも同じだ。

どちらが正しい答えなのか、判らなくなる。

大和の頭の中で、結論は出なかった。しかし、ただ願望としての答えなら出た。

「そりゃ生きてのほうが」

希思は同意したように頷いて、続ける。

「じゃあ問題ないよねん」

「……ああ……」

希思は裂人に向かって歩いていき、座り込んで顔を覗き込む。

もう一度、大和は迷う。たとえ生きていても、死にも等しい状態だ。しかし、確かに死ぬのとは違うのだろう。その境界を知りたい。知りたいが、教えてくれるものなどはない。

ふと大和は先ほどを思い出し、思考を全て振り払う。

(考えるのは後だ、今は……)

希思の呑気な声が耳に聞こえるが、意識できなかった。

「大和、こいつを運ぶよ」

「……………」

「大和く？」

とてとて、と希思は近づいてくる。そのまま、俯いた大和の顔を見ようと、顔の下に入り込み、見上げる。

大和はそれに気づき、とっさに顔を上げた。しかしすでに紅潮していることも、自分で分かるほどだった。

顔が戻る、そのくらいの時間は経った。頭の中で必死に言葉を選び、希思に伝える。

だが結果としては、大和自身も何を言っているのかさっぱりわからないようだった。

しかし、気づいていたのか希思は止めることなく、大和に言う。

「むいゝ。じゃあ、しばらく待つてる。早く行って、早く帰ってくるんだよ」

殺し合いとは言わなかった。希思が付いてきても、困るから。

それは希思が弱い訳じゃない。むしろ大和は自分より希思のほうが遥かに強いことを知っている。しかし、これは自分の問題なのだ、この殺し合いに希思は関係ない。だから参加して欲しくない。希思にはまだまだすることがあるのだ。そう勝手に理解する。

じゃあ、言ってくる。

そう言って駆け出したのは裂人を下してから数十分後のこと……

大通りに出るのは直ぐだった、先ほど戦っていた裂人が砕いたのである。瓦礫が道を教えてくれた。

後ろに希思がいないことを確認し、大通りに出る。

直ぐに、左右を見て人影を確認する。

(右、……左)

「どこ見てんだ、よっ!!」

殺気にも反応したというべきか、一瞬でその場から飛びのく。瞬間に、激しい爆音が聞こえた。鼓膜を貫くような異常なほどの高音の爆音。

そして、攻撃のあったほうを、振り向く。

それは……

(空?)

空を見上げる、しかし、人影などない。あるのは小さい球体だけ。

「? 何だ?」

「ショータイムだなあ」

聞こえたのは、壊れた友人の声。

直ぐ目の前にいた、日常の中で一緒にいた親友だった人間。

「ちからテメエを唆した能力は俺が消してやるよ! 『磁砲』!!」

叫ぶと、紫電を纏う黒い砂鉄が大和の周りを漂う。

大和の命令に忠実な、磁力を操るこの世界での唯一の武器。殺すための武器ではない、植物状態にしてでも、殺さないための武器だ。

「お前を殺せば三人目だ!」

もう二人、一人は分かっている。それ以外にももう一人殺したのだろう。ここに来たのは少し前だ。と言った、その時間で、それだけの間で友人は狂ってしまったのだろうか? 否、違う。禪はもともと壊れ始めていたのだ。

大和は思い出す、自分がこの世界に来る前にあっていた禪を……

「大和、昼飯食うぞ、昼飯！」

「朝から昼飯食うなよ、むしろそれが朝飯だろ？」

大和たちの通っていた高校だ。その朝の朝のホームルームも始まる前の時間。いつも禪は大和の近くに寄ってきて、馬鹿話や、最近の政治家は、など、無駄話ばかりしていた。そんな禪を見るのも大和の日常の一環だった。

それが変わったのは何時からだろう？ 大和はそう思うと、もう少し先の日を思いだす。

大和はいつもどおりに学校にただけだ。いつもと変わらない、いつもと同じ時間、違ったのは禪がいなかったこと。

後で知ったが、その前日、禪の唯一の家族であった姉が交通事故に会い、病院に運ばれていたらしい。らしいというのも、友人といってもそれは学校内の、であったから。学校を出て、休日にもなってしまうえば、あまり干渉することがなくなる。家が遠い、そんな理由が多いが、大和と禪も同じだった。

その日の授業はいつもと同じ、つまらなく、退屈で抜け出したいと願った日常そのものだった。

しかし、その時の禪には違ったのだろう。今現在、授業を受けている大和とは違う場所で、非日常を見ているんだろう。だがそんなこと、大和の知る由もなかったのだが。

放課後、大和は何も考えずにつまらない一日の半分が終わったことを実感すると同時に、もう半分を過ごす家への帰路についていた。夕焼けが映える、真っ赤な空を見上げて歩いていると、今日いなかったはずの禪が制服姿のまま、立っていた。

大和は声をかけるか迷ったのだが、結局は声をかけた。

「禪？」

返ってきたのは、老人のようにしゃがれた声。

「ああ、なんだ？ 大和？」

禪が壊れだしたのはその頃からかもしれない。

「どうしたんだ？」

「バカみてえだな、って思ったのさ」

「何が？」

「全部……………」

首をかしげて、その言葉の意味を聞こうとする。だが、聞く前に禪はいなくなった。

見えたのは夕焼けの中を歩く禪の後姿だけだった。

次の日、禪はいつもの禪に戻っていた。しかし、それは表面上だけだったのか。そして噂の中で聞いた。

あの日、禪の姉は静かに息を引き取った、と。

大和はよくは分からなかったが、少し、分かってしまった。

「意味の無いことを何、がんばってたんだろうな？ 全部、壊れちまえばいいんだよ……………」

夕焼けの中、しゃがれた声で聞いた、この世界に絶望するかのような言葉を……………」

それから、禪は変わった。いつも以上におかしなテンションで、クラスを盛り上げていた。

しかしその内にあるものなど誰も知ろうとしなかった。

壊れていたのは禪だけだったのだろうか。大和はふとそう考えてしまった。

もしかすれば、すでに人間というのはすべての者が狂い、嘆いているのではないかと。

第十話：胎動する小太陽

まだ太陽が天頂を迎えない時、”ミズガルズ”の大通りの一つ、対峙する本来親友であった二人。

一人を包む黒い砂鉄の帯、もう一人の頭上で奇妙に漂う小さな球体。一人は殺さないために、一人は殺すために、道を違えたもの同士。どちらが正解かなど誰にもわからない。

このゲームは殺し合うためのもの、しかし本来人間とは殺すことを恐れるもの。そんな矛盾したゲーム。

生きているだけなら、恐怖から抜け出す方法など無い。しかし、ゲームを肯定したとき、そんな瞬間に恐怖はほかの感情に変わる。

まだ、殺すことに恐怖する大和。ゲームを肯定し、恐怖を打ち消した石動禪。二人は昼が近づく陽光の中、緊迫した雰囲気の下、対峙する。

「『磁砲』」

大和は言う、その瞬間に黒い砂鉄は、大和の右手を包み黒の手甲と化す。

対し、禪は手を前に差し出すだけだった。といつても、禪にとってそれはすでに、攻撃開始の合図。

「大和、直ぐに殺してやるよ」

「今すぐ俺がお前を止めてやる！」

刹那、風を切る音と共にビームのような光の一閃が大和の足元を襲う。

直撃した地面が音をたてて弾ける。細かい粉塵が視界に入り込み、大きいに分類された地面の欠片は大和の眼前で舞い、視界から禪の姿を消す。

黒の手甲を供えた右手で眼前の瓦礫を払う。見えるのは煙と細かい粉塵だけ。

油断することなく、大和は構える。素人の構え、とても戦いになれた、とはいえないような構え。

もう一度、空気を切り裂く音が聞こえる。禪にとって狙う場所などひとつしか存在しない。大和はそれをわかっている。

視界が無い中、当てるのが一番簡単なのは 真正面からの攻撃だ。

音が聞こえた瞬間、右へと飛びのく。空中で体を捻り、元いた場所を見ると一条の光線が走る。

その光線は背後にあった建物を撃つ。瓦礫が派手にとび、建物には巨大な穴が創られていた。

一撃の威力など、これを見ればわかってしまう。大和は頭の中でこれに匹敵すると思しき攻撃を考え始める。

「『天槍』それが俺の能力だ」

声が聞こえたのは粉塵の中から、姿を見ることは適わない。

しかし、聞かずとも判る。こんな行動が本来人間が持つべき力ではない。

そして、大和はその発生源となるであろう物体を見た。

それは先ほどから禪の頭上で漂う小さな球体。しかしそれは先ほどとは違い、まるで白い光を貯えた太陽だった。

「まだ、磁砲は……」

「待たないぜっ！」

あの球体が一閃を放つにしても、当たらなければ関係ない。避けれるという確証もあった、あの光線は曲げることが出来ない。それをあの二発だけで理解した。

大和は地面に磁砲を広げると同時に足元で反発を起こし、禪のいるであろう場所へと跳躍を開始する。

その速度は先ほどの光よりは遅いが、まるで弾丸とも言えた。

まるで大和へと、返事を返すかのように小さな太陽は光の雨を降らす。

それは先ほどの大槍とは違い、右手の手甲ですら受けきれぬ程度の威力。光の密度で威力が決定する、禪の『天槍』の特性だ。

大和は、右手だけで防ぎきれないと理解すると、自分を守るために黒い砂鉄で壁を作り出す。

そして、砂鉄の殻の中でもう一つ、考える。

（光の槍を放つには時間がかかるみたいだ、それ以外の光線は防げる。だったら、予備動作^{チャージ}の中、球体を破壊すればいい、それだけだ）
答えは出た、それは今まで考えていた二つの問題。一つは能力の穴、もう一つは大槍に対する攻撃。

大和はその一つの行動に移ろうとし、砂鉄の殻を薄くしていく。視界の確保、それが目的だった。

薄くしてしまった分、光の雨が黒の壁を突き抜ける。それは出来るだけ右手で払いのけ、時を待つ。

「何時まで籠ってんだよおっ!!！」

痺れを切らしたような禪の怒声。そして光の雨は砂鉄の殻の前の地面を打ち始める。

それを機に、大和は走り出す。今なら、黒の壁、そして再び舞った粉塵で禪は大和の姿を確認することは出来ない。しかし、大和は違う動くことの無い禪の居場所など、すでに距離すらも把握していた。

壁を抜け、横から、禪が見える程度まで走る。

「寝る時間だ!!！」

見えた瞬間、反発しての跳躍。それと同時に拳を振り上げる。

「デメエがな！」

しかし禪の反応は早かった。球体は横回転を繰り返しながら、禪の足元数センチ前で光を放つ。光の一線が光の面となり、まるで砂鉄の殻と真逆の、薄いが通るものを打ち砕く光の膜が創造される。

回転する球体は止まらず、光の膜は完全に形を成していく。

必然というべきか、すでに止まることの出来ないほどのスピードで駆けていた、いや跳んでいた大和に避ける方法など無かった。

その時点で、もう光の膜は完全に禪を覆い、その中に人影だけを残り外界を遮断していた。

大和は自分の速度を殺そうとするが、止まらない。仕方なく、ただ必死で体を擦って頭からの直撃を避ける。

大和は自分の速度についてきていた、少ない砂鉄で体を覆う。

「くっ！」

背中から、光の膜へとぶつかる。砂鉄の服とも言わべき少なかつたものは、少しの気休めしかならなく、激痛が大和を襲う。

当然、その隙を逃すことなど、禪にはあり得ない。

「お前は、馬鹿みたいに正直なんだよ！」

激痛の上から、さらに背中に衝撃が走る。蹴られた。大和がそう理解したときにはすでに遅い。

キュウウウウツッ！！

音が聞こえる。それはモーターが限界を超えて高速で回転を繰り返すような、そんな音。

それは、先ほどは光の雨に意識を取られて聞こえなかった。光を凝縮する、大槍を放つための充電というべき行動の音。

先ほどよりはるかに速く、天槍は放たれる。

光は墮ちる。天槍という巨大な槍は無慈悲にも大和を捉えた。

「『磁砲』！」

しかし、大和がそれだけであきらめるはずも無い。黒い砂鉄を操り、無理やり自分の足を引っ張る。引っ張られた瞬間に、伸ばされたままの左腕に光の槍の一片が掠る。

ただ掠っただけなのだが、痛みは大きかった。先ほどの裂人の戦いの時、傷つけられた左腕もまだ少しばかり痛むのも合わさっている。

「ちい、外した！」

「残念だな、もう一回……こっちの番だっ！」

立ち上がり、大和は禪に向かって手を伸ばす。それと同時に、黒い砂鉄が宙を泳ぐ波のように禪へと向かっていく。

「こんなもの」

光が黒を穿つ。だが砂鉄の進行は止まらない。

海の波と一緒に、たとえ一つの障害物があるうと、すべてを一瞬で止めぬ限り返ることなど無い。

そして、止まることなど無い。それは徐々に小さくなっていくしかない、しかし砂鉄の波は小さくなどならない。

「この波を止められるものなんて、ねえよ」

砂鉄は禪を飲み込む、そう確信した瞬間に、球体が禪の目の前に下りてくる。

禪の眼前で止まり、球体は先ほど照らした以上の光を放つ、光線と化したものではない、単純に眩い光だ。それは太陽を直接見るかのような異常な光。

それを直接的に見ていれば、確実に眼という器官は役目を放棄し

ただらう。視神経が焼ききられ、眼は意味をなくす。

砂鉄の黒で視界が埋められていたはずの大和は目を見開く。黒い砂鉄は消え、光の球体は宙へと舞い戻っていた。

「ツちい！？ なんだよ今の？」

「穿てツツ！！」

大和が戸惑った瞬間、禪は間髪入れずに光の雨を降らす。大和はとっさに砂鉄の壁を作り出そうとするが、砂鉄は言うことを聞かない。

「なっ！？」

そのせいで一瞬の反応が遅れた。だがとりあえず、横に飛ぶ。

その瞬間だけで何本かの光が足や腕を薙いだ。

「くそっ！ 『磁砲』！！」

言い聞かせるように強く言い放つと、砂鉄は思い出したかのように大和を覆う。

しかし、それはすでに遅かったのかもしれない。

「盾を削ってももう遅いぜ、チェックメイトだ」

光の球体は膨張する。

そして、一つの間を置くと、球体は異常なほど大きな槍を吐き出す。

「殺ったか？」

禪の視線の先には地面をくりぬいたときの粉塵が舞っている。言葉ではまだ確証は見出していなかった、しかし、禪は自分の出せる

最大の槍を放つたのだ、仕留めないわけが無い。

そう思っていたのに、確実に消したと思っていたのに。

粉塵が晴れ、見えたのは人影。

「糞がつ！ 何で生きてれんだよ！」

悪態づき、人影に睨みをきかせる。

しかし、禪は突然の異変に気づき、後ろへと飛び退く。粉塵を中心にして、地面が黒く染まっていく。球体は今度こそ、止めをさす。そのためにもう一度、光を放つ瞬間に、更なる異変が始まった。

粉塵が一瞬で払われ、大和の姿が鮮明に見える。傷は少なくとも無いが、致命傷となる傷は無い。

そして、見えた大和は手を真つ直ぐに禪へと突き出すような格好をしていた。その手、いや手の前に作られた砂鉄の塊、そこに、この周囲に存在するであろう鉄と名の付く物体が磁気嵐に乗り、吸い寄せられていた。

磁力という引力に吸い寄せられ、斥力によつた圧縮された巨大な鉄の弾丸。

それが回転を始め、次第に速く、時間と共に完全な球体へ、その赤熱する球体は禪のものとは違うもう一つの小太陽。

「く、ああ………かつ………！」

禪は悲鳴を上げる、圧縮熱と摩擦熱。さらに電磁波によつて揺さぶられた空気が周囲全ての水分を蒸発させる。

そこに存在するのは、一片の潤いも許されない灼熱の砂漠。

（なんだよ、これ………）

考えると同時に禪の横を高温の何かが走り抜けた。狙い通りなのか、外したのかは分からない。しかし、それは禪の光の槍より、いとも簡単に、さも当然のように地面を砕く。

禪の背後で、地面が爆発し、粉塵が舞う。

間もなく、遅れてきた衝撃波に身を叩かれ、体が重力を失ったかのように、ある家屋へと激突する。

「……………くっ……………！」

「電磁加速砲、時速三千キロを超える弾丸」

馬鹿げた代物。超音速を超えた異常な、大和の武器。禪の大槍に對抗すべく考えられていたもう一つの答え。しかし、それは大和の理解の範疇すらも超えていた。

その異常なまでの威力を見ようと、禪は諦めなどしない。自分の夢を叶えるために……………

「黙れっ！！俺は、勝ち残るんだよ！」

ただ、目的を果たすために。そのために親友は友を殺す。声を張り上げ、感情をあらわにする。

「何を叶えるんだよ」

対し、大和の声は恐ろしく冷静で冷徹だった。

だが、親友をここまで変えてしまった目的とはなんなのか、知りたかった。しかし案の定というべきか、返ってくるのは答えではない返答。

「全部、ぶっ壊してやる……………この……………全部……………」

それから、禪はまるでうわ言のように繰り返し続ける。

その瞬間に禪の目は、光を灯す事をやめた。あるのはただ、真っ暗な闇ばかり。

大和には、こんなにも堕ちてしまった親友など見ていれるはずが無かった。だから……………

「今すぐ、楽にしてやる」

手を、光る球体へと向ける。

もう一度、電磁加速砲レールガンを放つために、磁気嵐を伴い鉄と名のつくものを吸い寄せせる。

だが……………それは叶わない。

「くっ、さすがに……………かはっ……………！」

片膝をつき、咳き込む。その時に磁気嵐が止む。

吐いたものは、血。

当然だ、電磁力というものが肉体に与える影響は凄まじい。電子レンジがマイクロウエーブで水の分子を揺り動かし熱を生むように全体の60%が水分の人体は電磁力に多大な悪影響を受ける。

その結果、体内の血液が沸騰し、毛細血管は破裂。内臓機能には変調をきたす。

水と身体細胞の調和で成り立っている人間にとって、この力は諸刃の剣とも言うべき力なのだから。

「無茶だったか……………でも、まだ……………」

禪はすでに立ち上がっていた。同時に球体は禪の頭上へと移動していくのが見える。

「……………くくくくく、くはははははっ！ 何だ、大和、テメエも限界なんじゃねえか」

再び禪の瞳に何か、おぞましいほど異形の光が灯り、その口から響き渡るものは嘲笑。

「……………っ！」

同時に、光の雨が降る。

何度と無く見た、光の球体から吐き出される光の雨。

大和は無理やり立ち上がり。一步、また一步。後ろへと飛びのいていく。

「死ねっ！ 死ねええっっ！！ 撃ち付くせえっ！ 天槍オオツ！！」

光の雨に混じり、巨大な槍すらも放たれる。

「つちい！ まだ、まだであつ！！ 磁砲オオツ！！」
砂鉄は壁を創り、同時に砂鉄は波と成り、禪へと向かう。

光は砂鉄を穿ち、波となった砂鉄は光の檻を突き破る。
光と黒の穿ち合い。

「邪魔だつ！！」

光の雨は止む。主の夢を叶えるため、最狂の光の槍で穿つため、
白い光の小太陽はさらに輝く。

黒の波は止まる。主の目的を成すため、最強の弾丸で穿つため、
赤熱する小太陽が回転する。

大和は自分の身を気には留めない。この一瞬、そう、たった一瞬
での出来事なのだから……………
禪は親友のことなど気には留めない。このゲームにきた以上、生
き残るのは一人なのだから……………

一瞬の間のさらに刹那、光は輝きを鎮め、黒は回転を鎮める。
天槍が狙うのは大和自身、磁砲が狙うのは白く輝く球体。

それは遥かに、大和に分の悪い勝負。

しかしその賭けを、その勝負を止めたりはしない。

最後の一撃、その始動の聲が放たれるのは同時……………

「『天槍』！」

「『磁砲』！」

二つの小太陽は、始動の言葉を待つかのように、胎動する。

そして……………

「「穿てええつ！！」」
激しい爆音と共に、レールガン電磁加速砲とミルキーウェイ天槍は激突しあう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3761c/>

一つのゲーム

2011年1月20日14時48分発行